知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（13）

神野貝塚

個人畑地改良に伴う埋蔵文化財試掘・確認調査報告書

2014年3月

鹿児島県知名町教育委員会

序　文

この報告書は、個人畑地改良事業に伴い、平成24年度に実施した神野貝塚の試掘・確認調査の成果をまとめたものです。

神野貝塚は、昭和57年から昭和58年に沖縄国際大学考古学研究室・鹿児島大学考古学研究室により発掘調査が実施され、奄美・沖縄諸島の縄文時代の解明に貴重な資料を提供した学史的に大変重要な遺跡です。

今回の調査においても、縄文時代前期から縄文時代後期の土器や石器・貝製品などの貴重な遺物が出土し、遺跡の範囲の広がりが確認されました。

この成果が、沖永良部島や奄美・沖縄諸島の先史文化の一端を解明する資料として広く活用されることを期待いたします。

最後に、調査・報告書作成にご指導・ご協力くださいました鹿児島県教育庁文化財課・埋蔵文化財センターをはじめ、発掘調査や整理作業に従事された関係者各位、遺跡の保存にご理解をいただきました地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成２６年３月　　知名町教育委員会
教育長　豊島実文

第1図　沖永良部島神野貝塚の位置

例　言

1　本書は、文化庁の補助を受け平成24年度に実施した個人畑地改良に伴う埋蔵文化財試掘・確認調査の報告書である。

2　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、知名町教育委員会が主体となり、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター・和泊町教育委員会の協力を得た。

3　試掘・確認調査は平成24年度に実施し、主な整理作業は平成25年度に実施した。

4　本書で用いたレベル高は海抜を表し、方位は磁北を示す。

5　遺物は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。

6　本書の執筆は次のとおりである。

第Ⅰ章　森田

第Ⅱ章　宮城

第Ⅲ章　森田・宮城

第Ⅳ章　森田・宮城

7　現地調査に関する実測及び写真撮影は、森田・武原・西田・堂込（埋文センター）・東（同）が行った。遺物の実測・トレース・拓本は森田・宮城・柳・山田・山﨑が行い、和泊町教育委員会の支援・助言を得た。出土遺物の写真撮影は、森田・宮城・東が行った。

8　調査・報告書作成にあたっては、次の方々にご協力を賜った。記して感謝申し上げます。（順不同）

堂込秀人　東和幸　前迫亮一　新里貴之　鐘ヶ江賢二　中山清美

北野堪重郎　入来一夫　大堀皓平　具志堅清大　瀬戸哲也

亀島慎吾　境谷牧子　沖成ひとみ　新納忠人　加藤祐三

9　本書の編集は、森田・宮城が行った。

10　出土遺物は、知名町教育委員会が知名町中央公民館に保管・展示する予定である。

目　次

序文 …… 〈1〉
例言 …… 〈3〉

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　調査の組織 …… 1
第3節　調査の概要と経過 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 4
第1節　遺跡の位置及び地理的環境 …… 4
第2節　歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　神野貝塚の試掘・確認調査の成果 …… 11
第1節　調査の概要 …… 11
第2節　調査の方法 …… 11
1．トレンチの設定 …… 11
2．発掘調査の手順 …… 11
第3節　層序 …… 11
1．1トレンチ …… 14
2．2トレンチ …… 14
3．4トレンチ …… 14
4．5トレンチ …… 15
第4節　土器の分類 …… 15
第5節　各トレンチの調査 …… 17
1．1トレンチ …… 17
2．2トレンチ …… 19
3．3トレンチ …… 24
4．4トレンチ …… 25
5．5トレンチ …… 27
6．6～9トレンチ …… 30
7．自然遺物 …… 30

第Ⅳ章　総括 …… 38
報告書抄録 …… 59

挿図目次

第1図　沖永良部島神野貝塚の位置 …… 〈2〉
第2図　周辺の遺跡 …… 10
第3図　神野貝塚トレンチ位置図 …… 12
第4図　神野貝塚土層断面図 …… 13
第5図　1トレンチ遺構配置図 …… 17
第6図　1トレンチ出土土器 …… 18
第7図　1トレンチ出土石器・貝製品 …… 19
第8図　2トレンチ出土土器(1) …… 20
第9図　2トレンチ出土土器(2) …… 22
第10図　2トレンチ出土石器 …… 23
第11図　2トレンチ出土石器・貝製品・骨製品 …… 24
第12図　4トレンチ出土土器 …… 26
第13図　4トレンチ出土石器 …… 27
第14図　5トレンチ遺構配置図 …… 29
第15図　5トレンチ　ピット1・ピット2 …… 29
第16図　5トレンチ出土土器・石器・表採石器 …… 29

図版目次

図版1　神野貝塚周辺空中写真(1) …… 42
図版2　神野貝塚周辺空中写真(2)ほか …… 43
図版3　1T～5T調査区近景ほか …… 44
図版4　表土剥ぎ状況ほか …… 45
図版5　1T遺物出土状況ほか …… 46
図版6　2T遺物出土状況ほか …… 47
図版7　4T遺物出土状況ほか …… 48
図版8　5Tピット検出状況ほか …… 49
図版9　6T試掘状況ほか …… 50
図版10　1トレンチ出土土器・2トレンチ出土土器(1) …… 51
図版11　2トレンチ出土土器(2)・2トレンチ出土土器(3) …… 52
図版12　4トレンチ出土土器(1)・4トレンチ出土土器(2) …… 53
図版13　5トレンチ出土土器・1・2トレンチ出土石器 …… 54
図版14　1～5トレンチ出土石器・表採石器 …… 55
図版15　貝・骨製品・貝類遺体(1) …… 56
図版16　貝類遺体(2)・脊椎動物遺体(1) …… 57
図版17　脊椎動物遺体(2)・脊椎動物遺体(3) …… 58

表目次

第1表　知名町遺跡地名表 …… 8
第2表　試掘トレンチ一覧表 …… 30
第3表　土器観察表 …… 32
第4表　石器計測表 …… 34
第5表　貝製品計測表 …… 34
第6表　骨製品計測表 …… 34
第7表　貝類遺体一覧表 …… 35
第8表　脊椎動物遺体一覧表 …… 37

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至る経緯

平成23年、知名町教育委員会は知名町大津勘所在の神野貝塚周辺において個人による畑地改良計画を把握した。神野貝塚は、昭和57年・昭和58年に沖縄国際大学・鹿児島大学によって発掘調査が実施されており、複数の遺物包含層をなす重要な遺跡である。畑地改良予定地は、過去の調査地点からサイクリング道路を挟み北東方向に位置し砂丘の末端部分と考えられた。また、遺物の散布も認められたため、畑地改良前に確認調査が必要であることを説明し、平成24年度に国・県の協力を得て国庫補助事業により調査を実施した。隣接する地点についても可能な範囲でトレンチを設定し、試掘・確認調査を実施した。

第2節　調査の組織

平成24年度　試掘・確認調査

事業主体	知名町教育委員会
調査主体	知名町教育委員会
調査責任者	知名町教育委員会教育長　豊島実文
調査事務担当	知名町教育委員会事務局生涯学習課長　榊　憲次
調査担当	知名町教育委員会事務局生涯学習課　森田太樹
	鹿児島県立埋蔵文化財センター調査第1課長　堂込秀人
	鹿児島県立埋蔵文化財センター調査第1課第1係長　東　和幸
調査指導	文化庁記念物課文化財調査官　水ノ江和同
	鹿児島県教育庁文化財課埋蔵文化財係長　前迫亮一
作業員	知名町シルバー人材センター
	武原吉彦・西 櫻子・西 経音・西口優花・西田健太郎

平成25年度　整理作業・報告書作成

事業主体	知名町教育委員会
調査主体	知名町教育委員会
調査責任者	知名町教育委員会教育長　豊島実文
調査事務担当	知名町教育委員会事務局生涯学習課長　榊　憲次
調査担当	知名町教育委員会事務局生涯学習課　森田太樹
	知名町教育委員会事務局生涯学習課　宮城幸也
作業員	柳 文香・山田仁美・東 貴太・山﨑大悟

第3節　調査の概要と経過

〈平成24年度確認調査〉

調査期間　平成24年7月17日～9月27日・平成25年3月22日～3月25日

以下、週ごとの調査経過について記載する。

7月17日（火）～7月20日（金）

機材搬入・調査区域伐採作業・テント設営。

1トレンチ設定。トレンチ遺物包含層検出作業・遺物包含層掘り下げ・清掃・写真撮影。

トレンチ壁面清掃・写真撮影。

サブトレンチ設定。暗褐色粘質層、明褐色混砂層検出及び掘り下げ。土器片少量確認。

7月23日（月）～7月27日（金）

1トレンチ掘り下げ、遺物取り上げ。

土器集中箇所確認、チャート片比較的多く確認される。

サブトレンチ一部で地山確認。

和泊町北野氏来跡。埋蔵文化財センター堂込課長調査支援。

2トレンチ～4トレンチ設定。3トレンチは撹乱が認められ、写真にて記録後埋め戻し。

4トレンチ包含層検出作業及び掘り下げ。

7月30日（月）～8月3日（金）

1トレンチ7層掘り下げ・遺物写真撮影・遺物取り上げ。

2トレンチにサブトレンチ設定、掘り下げ。4トレンチ遺物包含層掘り下げ。

台風接近のため、台風対策。

8月7日（火）～8月10日（金）

前半は台風のため調査中止。

1トレンチ排水作業・トレンチ内泥除去・清掃。

4トレンチ写真撮影・遺物取り上げ・遺物包含層掘り下げ・サブトレンチ設定。

2トレンチ遺物包含層掘り下げ。面縄東洞式・嘉徳Ⅱ式・平底・面縄前庭式出土。

知名町青少年リーダー研修一行調査見学・体験学習。

8月13日（月）～8月17日（金）

1トレンチ遺物包含層掘り下げ。

2トレンチ遺物包含層（黄褐色）掘り下げ、面縄東洞式・有文厚手の土器・チャート片出土。

4トレンチ遺物包含層（6層）掘り下げ。サブトレンチ掘り下げ、有文厚手の土器・獣骨等出土。

重機により排土処理。

8月20日（月）～8月24日（金）

1トレンチ遺物包含層地山直上層掘り下げ。スイジガイ・乳房状尖底出土。

2トレンチ遺物包含層掘り下げ・写真撮影。

4トレンチ写真撮影・遺物取り上げ、灰褐色層検出作業。短沈線文・羽状文土器・獣骨等出土。

台風接近のため、台風対策。土器洗浄作業。

8月27日（月）～31日（金）

29日まで台風・雨天のため作業中止。

現場復旧作業。遺物洗浄作業。4トレンチ暗褐色部分検出・掘り下げ。

9月3日（月）～9月7日（金）

1トレンチ清掃・写真撮影・土層断面実測。

2トレンチ遺物包含層掘り下げ。

4トレンチ遺物包含層掘り下げ・サブトレンチ設定・土層断面実測。

5トレンチ設定・遺物包含層確認後、サブトレンチを設定し掘り下げ。

一部地山層確認。写真撮影・土層断面実測。

重機排土処理等。遺物洗浄作業・機材整理等。

埋蔵文化財センター東係長調査支援。

和泊町北野氏・埋蔵文化財センター岩永氏・鹿児島大学新里氏一行来跡。

土地管理者入来氏来跡、現状説明し現状保存について協議。

9月10日（月）～9月14日（金）

2トレンチ清掃・写真撮影・土層断面実測。

4トレンチ・写真撮影・土層断面実測。

5トレンチ写真撮影・土層断面図実測。

機材撤収。

9月27日（木）

重機にて埋め戻し、整地作業。

3月22日（金）・3月25日（月）

192-1地点・190地点試掘調査。

6～9トレンチ設定。遺物包含層の有無を確認、写真撮影後、重機により埋め戻し。整地作業。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第1節　遺跡の位置及び地理的環境

神野貝塚は、知名町大字大津勘字神野に所在する。遺跡の位置する沖永良部島は、奄美群島に属する周囲49.3㎞、面積94.51k㎡の島である。知名町は鹿児島から南へ542㎞、東北に和泊町と隣接し、東北に約32㎞を隔てて徳之島、南に約33㎞を隔てて与論島を、さらに60㎞を隔てて沖縄を望む位置にある。

気候は亜熱帯モンスーン気候区に属し、四季を通じて温暖な島である。島を取り囲むように珊瑚礁が発達する。特に南部海岸に顕著にみられる一方、北部海岸側では海食崖が連続してよく発達する。

地質学的にみると古生層を基盤とした第四紀琉球層群（隆起珊瑚礁）からなる比較的低平な島で、最高所の大山（標高245m）を取り巻くような形で数段の段丘が形成されている。また、大山を取り囲むような形でカルスト地形が発達し、ドリーネ（凹地）が数多く分布している。全島にわたって石灰岩に覆われているため雨水は地下に浸透して段丘間の斜面下、ドリーネの底部、浸食の進んだ部分あるいは海岸付近に湧水・暗川となって現れ、地下には石灰岩洞穴を数多く形成している。これらの湧水・暗川は河川の少ない沖永良部島においては、この水源が遺跡の分布、集落の立地に大きな関わりをもっている。

上述のような水環境や島の地形的特色は、先史時代から現在に至るまで集落立地を規定する要因となり、国指定史跡の住吉貝塚（縄文後期～晩期）、それに隣接する友留遺跡（縄文晩期～弥生中期）、神野貝塚（縄文前期～後期）、スセン當貝塚（古墳）などの著名な遺跡は、リーフが眼前に拡がる砂丘または段丘上に立地する。

神野貝塚は、太平洋に面する臨海砂丘地に立地し、一帯は防風林となっている。同砂丘の北端は大津勘川によって切られている。この川は上流では水流が認められるものの、下流では地下にもぐり、遺跡附近では大雨の時以外水流をみることはない。

第2節　歴史的環境

知名町では、昭和32年に九学会連合奄美大島共同調査の考古学班による住吉貝塚の発掘調査が行われた。調査では、自然の珊瑚礁の岩石面や石組みを壁面に利用した住居跡が1基発見され、遺物では宇宿上層式・宇宿下層式土器、土器以外には石器、貝製品、骨製品等が出土している。知名町の遺跡が考古学での研究対象となったのはこれが最初であり、これを契機に遺跡数が増加し、現在までに81遺跡が確認されている。（第1表・第2図）

以下、確認されている遺跡の中で、代表的な遺跡についての概要を述べ、その他の遺跡については表にまとめて紹介する。

住吉貝塚

知名町大字住吉字兼久の海岸付近に位置し、標高約12～15mの海岸崖上に立地する。遺跡南側は防波堤が築かれているが以前は砂丘地であった。1957年、河口貞徳らにより調査され、石囲い住居跡が検出されている。2001年、遺跡の範囲確認のため教育委員会により調査が進められ、これまでの調査の結果、多くの住居跡や土坑、集石が検出された。

縄文時代後期相当～晩期相当にかけての土器が多く出土している。石器では、石斧や磨石などが出土し、その石材として緑泥片岩や砂岩を使用していたことが特徴である。また、島外から持ち込まれたと考えられるチャートや黒曜石が少量ではあるが出土している。貝製品は、イモガイ製の貝玉が約67個出土している。

自然遺物については、脊椎動物遺体、貝類遺体、植物遺体の同定・分析によって、住吉貝塚は狩猟採集を中心とした生業の様相や環境であったことが判明している。

中甫洞穴

知名町大字久志検字水窪に所在し、大山を囲んで分布するドリーネの一つ、東北部山麓の標高約100mに立地する。地下にある水脈は北から南へ流れて鍾乳洞を形成し、窪地内に2ヶ所の鍾乳洞に通ずる洞穴が開口している。この開口部分と窪地内に遺跡が形成されている。遺構は、洞穴入り口の東側崖下から埋葬遺構が発見されており、縄文時代人1体と弥生時代人4体が確認されている。轟式や爪形文など縄文時代相当の土器、その上層からは、弥生時代～古代並行期の土器が出土している。土器のほかには、石器や牙・貝製品が出土している。

神野貝塚

知名町大字大津勘字神野に所在する。太平洋に面した場所に位置し、標高約5～10mの臨界砂丘地に立地する。縄文時代（前期～後期）の遺物が数多く発見された貝塚である。前期では室川下層式土器・神野A式土器・神野B式土器、貝匙・貝刃などの貝製品が出土した。中期では面縄前庭式土器、ジュゴンの肋骨を素材とした装身具の骨製品や多様な貝製品が出土している。後期では面縄東洞式土器、嘉徳Ⅰ式（A・B）・嘉徳Ⅱ式・神野D式・神野E式・伊波式土器が出土しており、その他、石器、骨製品、貝製品などが出土している。各時期とも移入土器である轟式土器（前期）・春日類似式土器（中期）・松山式土器（後期）が確認されていることから、九州本土との交流が存在していたことが判明している。

スセン當貝塚

知名町大字屋子母字スセン當に所在する砂丘遺跡である。本遺跡は、昭和57年に高宮廣衛氏、小片丘彦氏、上村俊雄氏の分布調査によって発見された遺跡で、その後、鹿児島大学考古学研究室によって発掘調査が行われた。新型式の土器が出土し、上村俊雄氏によってスセン當式土器と命名された。時期は5世紀代（古墳時代相当）とされ、南九州と南島の文化交流があったことを示す資料として注目されている。石器は僅少しか得られていない。ヤコウガイを原材とした貝匙、貝小玉などが目立ち、大型貝の集積状況が確認されている。

石原遺跡

知名町大字余多字石原に所在し、内陸部の小高い丘陵地に立地する。遺跡は、個人の畑地造成、いわゆる「天地返し」により遺物が多量に散布していたために発見されたもので、昭和62年に熊本大学考古学研究室により発掘調査が行われた。縄文時代後期～縄文時代晩期頃の土器や貝製品等が出土している。

浜須B遺跡

知名町大字田皆字浜須に所在し、標高13m～23mの海に向かう緩やかな傾斜地に立地する。5基の住居跡が検出され、3号住居跡を除いては互いに重複した状態となっているが前後関係は判然としない。住居跡の形態はすべて隅丸方形で、1号住居跡のみ張り出しをもつ。
出土遺物は6・7トレンチから土器が多量に見つかっている。石器は、表採資料をあわせ数点得られており、4号住居跡内からは石斧、石皿などが出土している。遺跡の時期については、1・2・4号住居跡内出土遺物から、縄文時代後期相当から縄文時代晩期相当に属すると考えられている。

志喜屋武当遺跡

知名町大字住吉字志喜屋武当に所在し、海岸線から直線で約80m内陸に入った標高約15mの台地上に立地する。調査区B地点から住居跡が1基発見され、中央部床面付近で25cm×15cmの範囲で焼土面が検出された。住居跡からは、縄文時代中期末から後期初頭に位置づけられる古我地原式土器、その他にも石器が出土している。

友留遺跡

知名町大字住吉字友留に所在し、住吉海岸を目の前に望む標高約13～15mの海岸段丘上に立地する。縄文時代晩期相当～弥生時代中期前半の竪穴住居跡が検出された。土器は喜念Ⅰ式、宇宿上層式、宇佐浜式、仲原式など縄文時代晩期に並行する土器が出土したほか、弥生時代前期後半～中期前半頃に位置づけられる阿波連浦下層式土器に類似した土器が僅かだが見つかっている。貝類遺体については、出土量が極めて少なく、脊椎動物遺体については、魚類やイノシシを主要な食用資源とすることが分かっている。住吉貝塚よりやや新しい時期の仲原式土器期の竪穴住居跡が確認されていることから、住吉貝塚との関係性が注目されている遺跡である。

揚殿遺跡

知名町大字屋子母字揚殿に所在し、知名町南部の屋子母海岸から約500m内陸部に入った標高約14～19mの緩斜面に立地する。Ⅲ層でピットが多数確認された。そのうち、掘立柱建物跡としてプランを特定できたのは1棟（約1.6m×約1.9m）のみである。出土遺物は、縄文時代後期から縄文時代晩期に属する土器、古代併行期に位置づけられる兼久式土器が出土している。その他、滑石混入土器、滑石製品、カムィヤキなど小片ではあるが中世期のものが確認されている。

脊椎動物骨遺体、貝類遺体が縄文時代後期・晩期及び古代併行期を主体とする第2文化層から出土している。しかし、これらの自然遺物が縄文時代後期・晩期、もしくは古代相当期のいずれに属するかは分かっていない。

〔参考文献〕(五十音順)

沖縄国際大学考古学研究室 1985『沖国大考古 沖永良部島神野貝塚発掘調査概報(その1)−Aトレンチ−』第7号 沖縄国際大学考古学研究室

沖縄国際大学考古学研究室 1985『沖国大考古 沖永良部島神野貝塚発掘調査概報(その2)−Bトレンチ−』第8号 沖縄国際大学考古学研究室

沖縄国際大学考古学研究室 1987『沖国大考古 沖永良部島神野貝塚発掘調査概報(その3)』第9号 沖縄国際大学考古学研究室

上村俊雄 1983「沖永良部島の考古学的調査」『南日本文化』第16号 南日本文化研究所

上村俊雄・本田道輝 1984「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」『南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究』鹿児島大学法文学部考古学研究室

熊本大学考古学研究室 1988『石原遺跡』研究活動報告22 熊本大学考古学研究室

知名町教育委員会 1984『中甫洞穴』鹿児島県知名町埋蔵文化財発掘調査報告書

知名町教育委員会 1985『赤嶺原遺跡』鹿児島県大島郡知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

知名町教育委員会 1986『知名町埋蔵文化財分布調査概報』知名町文化財報告書(5)

知名町教育委員会 1988『前当遺跡』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

知名町教育委員会 1993『大当遺跡 浜須A・B遺跡』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

知名町教育委員会 2002『志喜屋武当遺跡』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

知名町教育委員会 2006『住吉貝塚』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)

知名町教育委員会 2009『友留遺跡』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

知名町教育委員会 2011『揚殿遺跡』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)

町誌編纂委員会 1982『知名町誌』知名町役場

第1表　知名町遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	住吉貝塚	住吉字兼久	砂丘	縄文後期	土器(宇宿上層・下層式)	昭和32年九学会調査
2	屋子母	屋子母字植村・上坂	丘陵		土器・石器	
3	**神野貝塚**	**大津勘字神野**	**砂丘**	**縄文**	**土器(室川下層式等)石器**	**昭和57・58年沖国大調査**
4	スセン當貝塚	屋子母字スセン當	砂丘	古墳	土器(スセン當式)石器	昭和57年鹿大調査
5	石原	余多字石原	台地	縄文	土器・石器・貝器	昭和62年熊大発掘調査
6	赤嶺原	赤嶺字赤嶺原	丘陵	縄文・歴史	土器・須恵器・青磁	昭和59年度確認調査
7	当ノ増	屋子母字当ノ増	砂土		土器・石器	昭和60年度分布調査
8	上城跡	上城字次石	山麓			
9	西目国内兵衛佐居城跡	下城字先間	山麓			
10	中甫洞穴	久志検字水窪	ドリーネ	縄文・弥生・歴史	土器(爪形文)石器・人骨	昭和57・58・59年発掘調査
11	永良部洞	瀬利覚字スマン辻	山腹		類須恵器・獣骨	昭和60年度分布調査
12	屋者琉球式墳墓	屋者字勝丸	平地			
13	屋子母セージマ古墳跡	屋子母字妻々	丘陵			
14	昇竜洞	住吉字吉野平川	山腹	中世	人骨・管玉	
15	アーニマガヤ古墳跡	赤嶺字マガヤ	丘陵			
16	新城花窪ニャート墓	新城	平地			
17	浜倉	屋子母字源手名	平地			
18	イクサイヨー洞穴	余多字石嘉喜	洞穴	縄文～古墳	人骨・土器・貝輪	昭和60年度分布調査
19	花城洞穴	上平川字花城	洞穴			昭和60年度分布調査
20	芦清良前金久	芦清良字前金久	砂丘		類須恵器	昭和60年度分布調査
21	塩津類ビ	屋子母字塩津類ビ	丘陵			昭和60年度分布調査
22	泊り原	屋子母字泊り原	丘陵	中世		平成16年度分布調査
23	川春	屋子母字川春	砂土		青磁片	昭和60年度分布調査
24	大津勘フーダトゥ	大津勘字フーダトゥ	台地		石斧	昭和60年度分布調査
25	大津勘フバド	大津勘字フバド	台地		類須恵器	昭和60年度分布調査
26	木部蘭迫	住吉字木部蘭迫	台地		無文土器・青磁片	昭和60年度分布調査
27	手殿	住吉字手殿	台地		青磁・染付	昭和60年度分布調査
28	友留	住吉字友留	平地		無文土器	昭和60年度分布調査
29	正名内間	正名字内間	台地	中世	類須恵器・白磁	昭和60年度分布調査
30	志良辺堂	正名字志良辺堂	台地	弥生・中世	類須恵器・石斧	平成9年度発掘調査
31	田皆伊美畑	田皆字伊美畑	台地		磨製石斧	
32	アンギム	下城字アンギム	台地		無文土器・類須恵器	
33	曽根	田皆字曽根	台地	古墳	土器片・チャート	
34	浜須A	田皆字浜須	台地	古墳～歴史	土器片・類須恵器	平成4年度確認調査
35	伊舎良	正名字伊舎良	台地		土器片	
36	池原	正名字池原	台地		類須恵器・青磁	確認調査
37	帯野	正名字帯野	台地		土器片	
38	川仁堂A	正名字川仁堂	台地		土器片・類須恵器	
39	川仁堂B	正名字川仁堂	台地		土器片・類須恵器	
40	ウロク畑A	正名字ウロク畑	台地		ふいご羽口	
41	ウロク畑B	正名字ウロク畑	台地		土器片	
42	ウロク畑C	正名字ウロク畑	台地		土器片	
43	前当	上平川字前当	台地	中世	類須恵器・鉄さい	
44	下平川1	下平川	台地	中世	類須恵器	
45	下平川2	下平川	台地		類須恵器	

第1表　知名町遺跡地名表（2）

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
46	下平川3	下平川	台地		類須恵器	
47	浜須B	田皆字浜須	台地	縄文後期～弥生	土器片	平成4年度確認調査
48	千間	正名字千間	台地	中世	類須恵器	
49	川切	余多字川切	台地	縄文～中世		
50	水連洞	大津勘字蓮木俣	丘陵	中世	類須恵器	昭和60年度分布調査
51	栄長鳥	余多字栄長鳥	台地	縄文～中世		
52	本田	余多字本田	台地	縄文～中世		
53	前兼久B	黒貫	台地	弥生・中世		平成8年度確認調査
54	前兼久C	黒貫	台地	中世		平成9年度確認調査
55	高アタ子	黒貫	台地	縄文		平成10年度確認調査
56	砂田	余多字砂田	台地	縄文		平成6年度農政分布
57	黒平	正名字黒平	台地			平成8年度確認調査
58	池原B	正名字池原	台地	縄文・中世		平成7年度確認調査
59	二俣A	正名字二俣	台地	縄文・中世		平成11年度確認調査
60	二俣B	正名字二俣	台地	縄文・中世		平成12年度発掘調査
61	阿岩	正名字阿岩	台地	縄文		平成12年度発掘調査
62	大平	正名字大平	台地	中世		平成13年度確認調査
63	内納当	住吉字内納当	台地	縄文・中世		平成9年度確認調査
64	志喜屋武当	住吉字志喜屋武当	台地	縄文	住居跡	平成12年度発掘調査
65	下田	住吉字下田	台地	中世		平成12年度発掘調査
67	阿部窪	住吉字阿部窪	台地	縄文～中世		平成13年度確認調査
68	星窪	芦清良字星窪	台地	縄文～中世		
69	前兼久	芦清良字前兼久	台地	縄文～中世		
70	具屋原	住吉字具屋原	台地	縄文～中世		平成10年度分布調査
71	ヤイント	屋子母字ヤイント	丘陵	中世		平成16年度分布調査
72	四文当	住吉字四文当	台地	中世		平成16年度分布調査
73	兼久	住吉字兼久	平地	中世		平成16年度分布調査
74	新場ノ前	住吉字新場ノ前	平地	中世	類須恵器	平成16年度分布調査
75	揚殿	屋子母字揚殿	丘陵	中世	無文土器	昭和60年度分布調査
76	上水窪	芦清良字上水窪	台地	中世	カムィヤキ	平成18年度分布調査
77	東風平	屋者字東風平	台地	中世		平成18年度分布調査
78	屋者高アタ子	屋者字高アタ子	台地	弥生		平成18年度分布調査
79	セキハナ	屋者字セキハナ	台地	縄文		平成18年度分布調査
80	興名仁	瀬利覚	平地	古代		平成24年度分布調査
81	シャノ平	知名字シャノ平	丘陵	古代	土器片・石器	平成14年度発掘調査

第2図　周辺の遺跡

第Ⅲ章　神野貝塚の試掘・確認調査の成果

第1節　調査の概要

神野貝塚は、1980年に沖永良部島の分布調査を行っていた沖縄国際大学の高宮廣衛氏らが、当時建設中であったサイクリング道路断面に遺物包含層を発見したことにより把握された。その後、昭和57年(1982)に沖縄国際大学、昭和58年(1983)年に鹿児島大学も加わり発掘調査が実施され、縄文時代前期から後期にかけての複数の遺物包含層が確認された重要な遺跡である。今回の調査地点は、沖縄国際大学・鹿児島大学の調査地点からサイクリング道路を挟み東側(陸側)の畑地に位置する。調査は、平成24年7月から9月にかけて確認調査を実施し、平成25年3月に隣接地の試掘調査を実施した。

第2節　調査の方法

1. トレンチの設定(第3図)

確認調査は、畑地改良予定の196番地2と耕作放棄地となっていた192番地3を対象に実施し、沖国大調査Bトレンチのほぼ延長線上に1・2トレンチを、Aトレンチの延長線上に3・5トレンチを設定した。さらに南側には4トレンチを設定した。

試掘調査は、サトウキビの収穫後に192番地1の砂丘側に6トレンチ、190番地には砂丘側から内陸側方向に7～9トレンチを設定した。

2. 発掘調査の手順

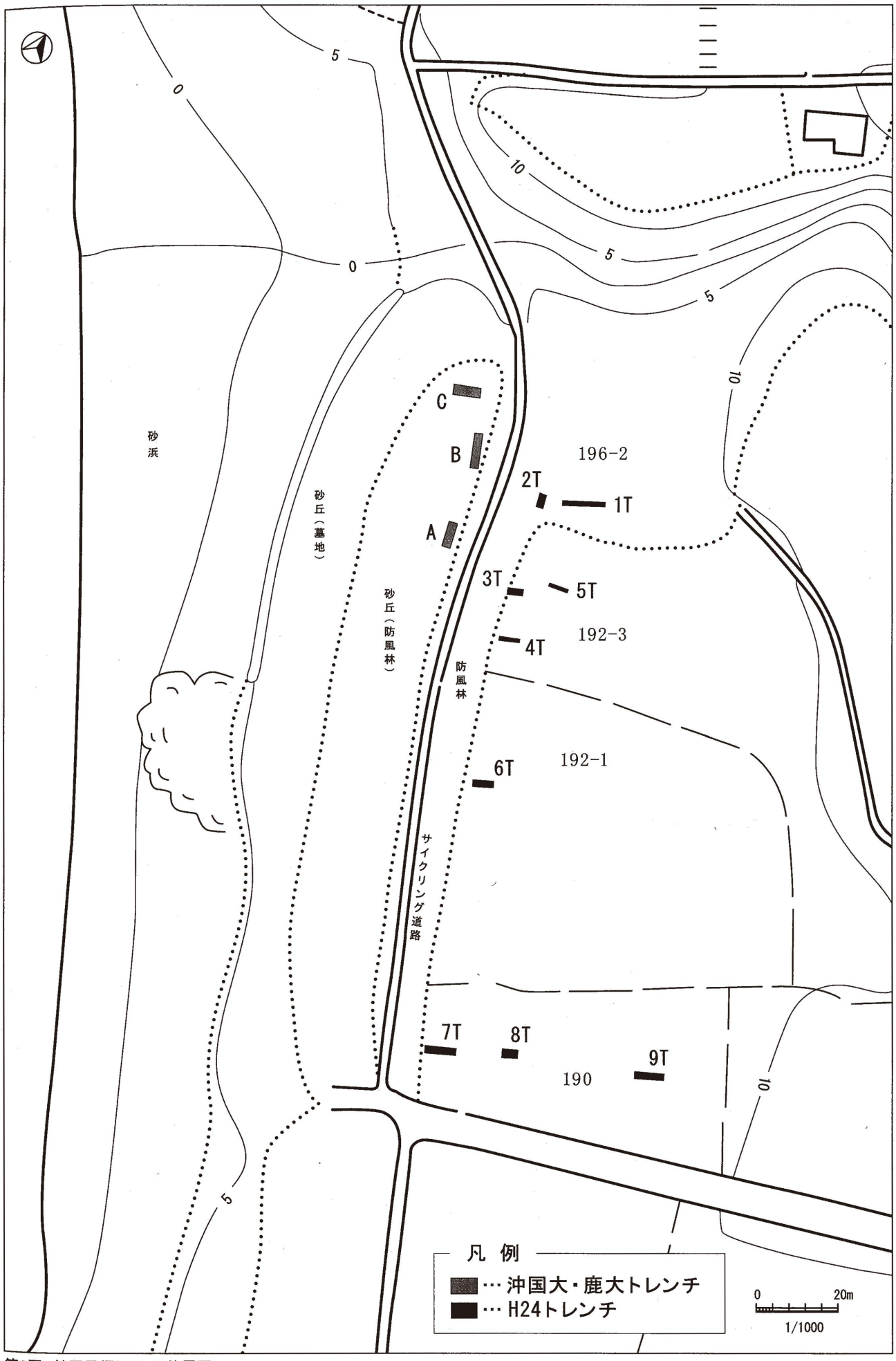
調査は、重機を使用し表土や無遺物層を除去し、遺物包含層や遺構が確認されたトレンチについては適宜拡張した。人力による検出作業・遺物包含層の掘り下げを行い、遺物は基本的に出土層ごとに取り上げた。試掘トレンチについても重機を使用し、遺物包含層または地山を確認した後、層序や深さなどを記録した後、埋め戻しを行った。なお、砂層が厚く崩壊の危険性がある部分については、地表面からの深さのみ記録した。

試掘・確認調査トレンチの位置は、第3図に示した。

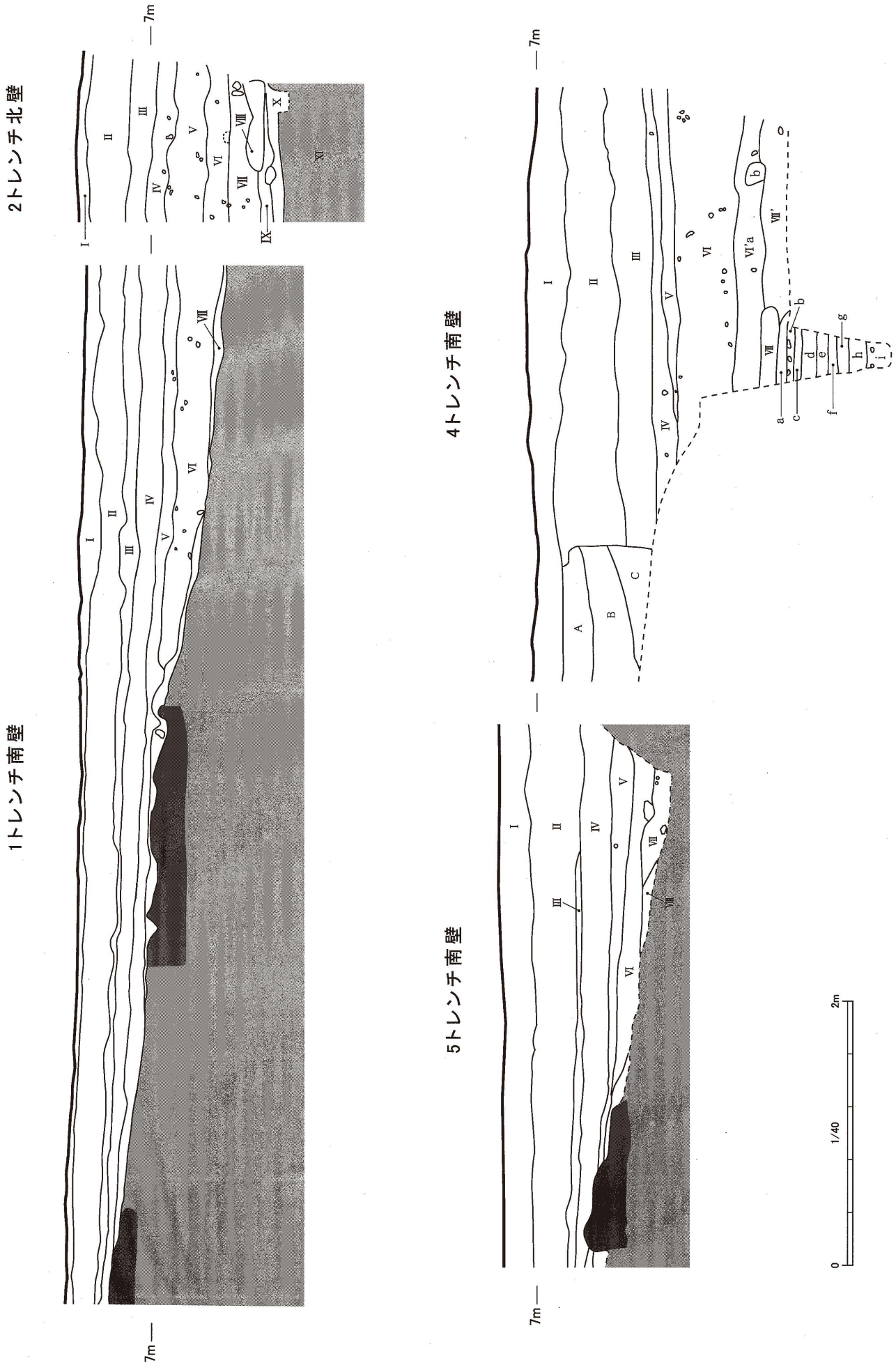
第3節　層序(第4図)

本報告の調査地点は、海岸から続く砂丘後背地に位置する。過去に調査が行われた砂丘の頂部から内陸側に緩やかに下る地形であったと考えられるが、サイクリング道路建設や畑地とする際の削平等により平坦地となっている。3トレンチは層の堆積が不安定で撹乱部分と判断し、写真記録後埋め戻した。後に4トレンチの一部でも同様の状況がみられた。地元住民からの聞き取りによると、通常、地下の鍾乳洞を通り海岸などに湧出する水脈の一部が大雨時などに地表に噴出することがあったことが判明したため、水流の影響による撹乱の可能性が高いと判断した。

以下にトレンチの層序と特徴を示す(第4図)。



第3図　神野貝塚トレンチ位置図



第4図　神野貝塚土層断面図

1．1トレンチ

Ⅰ層：表土。

Ⅱ層：旧耕作土。

Ⅲ層：明褐色混砂層。

Ⅳ層：暗灰褐色混砂層。

Ⅴ層：暗褐色弱粘質混砂層。軽石含む。（遺物包含層）

Ⅵ層：にぶい赤褐色混砂層。軽石含む。（遺物包含層）

Ⅶ層：赤褐色粘質層。（地山）

2．2トレンチ

Ⅰ層：表土。

Ⅱ層：旧耕作土。

Ⅲ層：暗褐色混砂層。

Ⅳ層：褐色砂層。締まりなし。（遺物包含層）

Ⅴ層：黒褐色砂層。軽石含む。遺物多量。（遺物包含層）

Ⅵ層：にぶい黄褐色砂層。締まりなし。軽石含み、遺物少量。（遺物包含層）

Ⅶ層：暗褐色砂層。部分的に黒褐色・褐色。軽石含む。締まりなし。（遺物包含層）

Ⅷ層：黄褐色砂層。部分的に暗褐色。遺物少量。（遺物包含層）

Ⅸ層：にぶい赤褐色混砂粘質層。遺物少量。（遺物包含層）

Ⅹ層：赤褐色粘質層。黒色・赤色粒含む。（地山移行層）

Ⅺ層：赤褐色粘質土。（地山）

3．4トレンチ

Ⅰ層：表土。

Ⅱ層：黄褐色粘質混砂層。

Ⅲ層：褐色弱粘質混砂層。

Ⅳ層：暗褐色弱粘質混砂層。軽石含む。遺物少量。

Ⅴ層：褐色混砂層。遺物少量。（遺物包含層）

Ⅵ層：明褐色砂層。やや締まる。（遺物包含層）

Ⅵ'層：a にぶい褐色砂層。軽石含む。（遺物包含層）

b 部分的に灰褐色。軽石含む。遺物少量。（遺物包含層）

Ⅶ層：褐灰色砂層。（遺物包含層）

Ⅶ'層：褐色砂層。遺物少量。（遺物包含層）

サブトレンチ

a:赤褐色砂層。 b:黄褐色砂層。土器を含む。 c:灰茶褐色砂層。 d:にぶい赤褐色砂層。
e:暗灰茶褐色砂層。 f:にぶい黄灰色砂層。 g:灰茶褐色砂層。
h:黄灰褐色砂層。土器を含む。 i:暗灰茶褐色砂層。貝・獣骨等・礫等を多く含む。

撹乱部

A:黄白色砂・灰褐色砂がラミナ状に堆積する層。
B:茶褐色粘土と黄白色砂が混在する層。
C:黄白色砂に茶褐色粘土を少量含む。締まりなし。

4．5トレンチ

Ⅰ層:表土。
Ⅱ層:褐色混砂層。
Ⅲ層:にぶい赤褐色粘質混砂層。軽石含む。
Ⅳ層:暗褐色粘質混砂層。軽石含む。
Ⅴ層:暗赤褐色粘質混砂層。(遺物包含層)
Ⅵ層:褐色粘質層。遺物少量。(遺物包含層)
Ⅶ層:明褐色粘質混砂層。(遺物包含層)
Ⅷ層:赤褐色粘質土。(地山)

第4節　土器の分類

土器は、縄文時代前期・中期・後期のものが出土している。主に、器形や文様などの特徴が分かるものを図化した。以下、土器の分類について述べる。

Ⅰ類

沈線文や貝殻を使用した文様を施すのが特徴で、全体的に厚手の土器である。小片資料が多いため、文様施文から細分を行った。

Ⅰ類a

斜位または横位・縦位方向に沈線文が施されるものである。施文された文様は、単独あるいは組み合わせによって「ノ」字状や「ハ」字状を構成するものが多くみられた。

Ⅰ類b

貝殻文のグループで、施文具は二枚貝を使用したと考えられるものである。

Ⅰ類c

刺突文が施されるものである。Ⅰ類a・bに比べ出土量は少ない。

Ⅰ類d

Ⅰ類a～cの文様が施されず、条痕調整または無文のものである。

無文土器については、胎土や色調の特徴からⅠ類の範疇と考えここに含めた。

Ⅱ類

胎土や色調はⅠ類と同じだが、いずれの文様に該当しないことから別型式の可能性が考えられるためここに含めた。

Ⅲ類

刻みの施された突帯を廻らし、突帯間及び下部に数条の細沈線を施すものである。

突帯部分が残存するものは少量であった。

Ⅳ類

数条の押引きを施し、横位・籠目状・階段状の文様構成をなすものである。

平口縁で肥厚するものが多い。少数ではあるが沈線により階段状の文様を施すものも本類に含めた。

Ⅴ類

口縁肥厚部下端に弧状の刺突を横位に連続して施すものである。

Ⅵ類

刺突文のみ、または刺突文と沈線の組み合わせにより文様を構成するものである。

山形口縁と平口縁がある。

Ⅶ類

沈線で綾杉文や羽状文・斜行文などの文様を施すものである。山形口縁と平口縁がある。

Ⅷ類

主に2点1組の短沈線文を横位に施すものである。浅い押引き状を呈するものもある。

Ⅸ類

薄手の無文土器である。焼成は良好なものが多い。

Ⅹ類

Ⅰ類からⅨ類に含まれないものを便宜的に本類に一括した。

第4節　各トレンチの調査

1．1トレンチ

196番地2の内陸側東西方向に1.8m×11mの範囲で設定したトレンチである。トレンチ東端部は約0.5mで地山である石灰岩盤や赤褐色粘質土に達する。地山面で4基のピットが検出された。地山面は西側に向かい緩やかに傾斜し、トレンチ西端部では地表面から約1.1mを測る。西側部分は、地山直上に赤褐色粘質土と砂が混在した層を形成している。Ⅴ層～Ⅵ層が遺物包含層で軽石を多く含む。自然遺物は貝類が比較的多いが2トレンチに比べ出土量は少ない。

(1)遺構

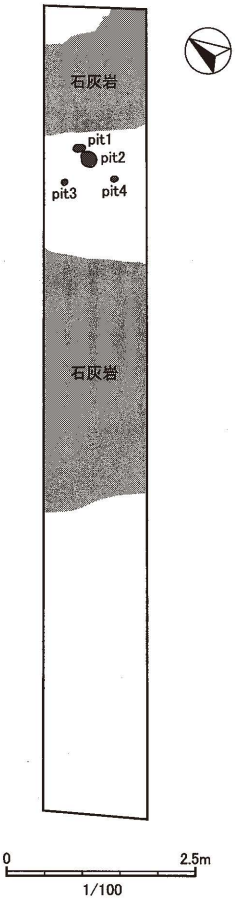
ピットは、トレンチ東側の石灰岩盤に挟まれた部分のⅦ層上面で検出された。位置を記録し掘り下げは行っていない。

(2)遺物

土器

Ⅰ類a（第6図1～5・7）

1は直口する口縁部片で、口唇部は平坦なつくりである。両面・口唇部に斜め方向からの沈線文が施され、表面に施された沈線文は「ハ」字状を形成している。2・3は表面にシャープな沈線文が施される。2は横位方向に施文、3は右下斜め方向に施文される。胎土に白色粒が多く含まれ、1は焼成が脆弱である。5は直口の口縁部片で、口唇部は丸みを帯びたつくりである。表面に施された文様は1と同じで、裏面に施されている2条の横位沈線文は上→下に向かう順序である。焼成は良好で、胎土に白色粒を多く含む。7は薄手の土器で、全体的に摩耗が激しいが表面に施された沈線文は残存している。



第5図　1トレンチ遺構配置図

Ⅰ類b（第6図6）

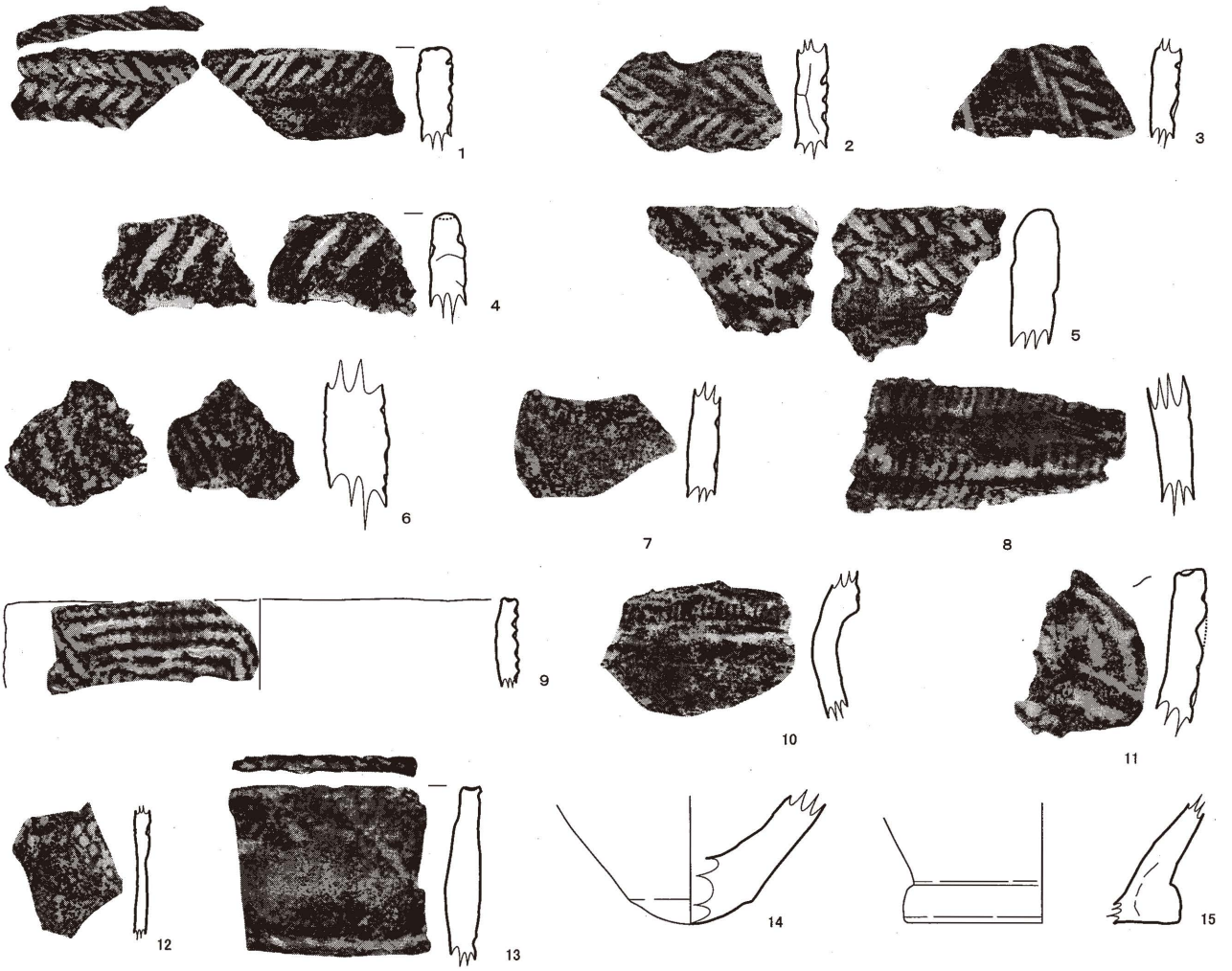
6は厚手の胴部片で、二枚貝を使用した貝殻文が右斜め下に流れるように施される。裏面には僅かな条痕の調整痕が認められる。

Ⅱ類（第6図8）

8は薄手の胴部片である。左→右方向へ弧状の文様が施されている。焼成は良好で、白色粒が多く含まれる。

Ⅳ類（第6図9・11）

9は口縁部片で、密な押引きにより籠目文様が施される。口唇部にも連続した刺突がみられる。11は上面観が方形をなす山形口縁の一部で、頂部は突起状になり刺突が施される。押し引きと沈線の組み合わせにより籠目状文様が施される。やや厚手の土器で焼成は比較的良好である。



第6図　1トレンチ出土土器

V類（第6図10）

10は肥厚する口縁部の下端から胴上部の資料である。口縁部下端に5㎜ほどの工具による弧状の刺突が施される。上部にも同様の刺突の一部が確認できるが全体の文様構成は不明である。2㎜～3㎜の鉱物粒を多く含み、焼成は良好である。

Ⅵ類（第6図12・13）

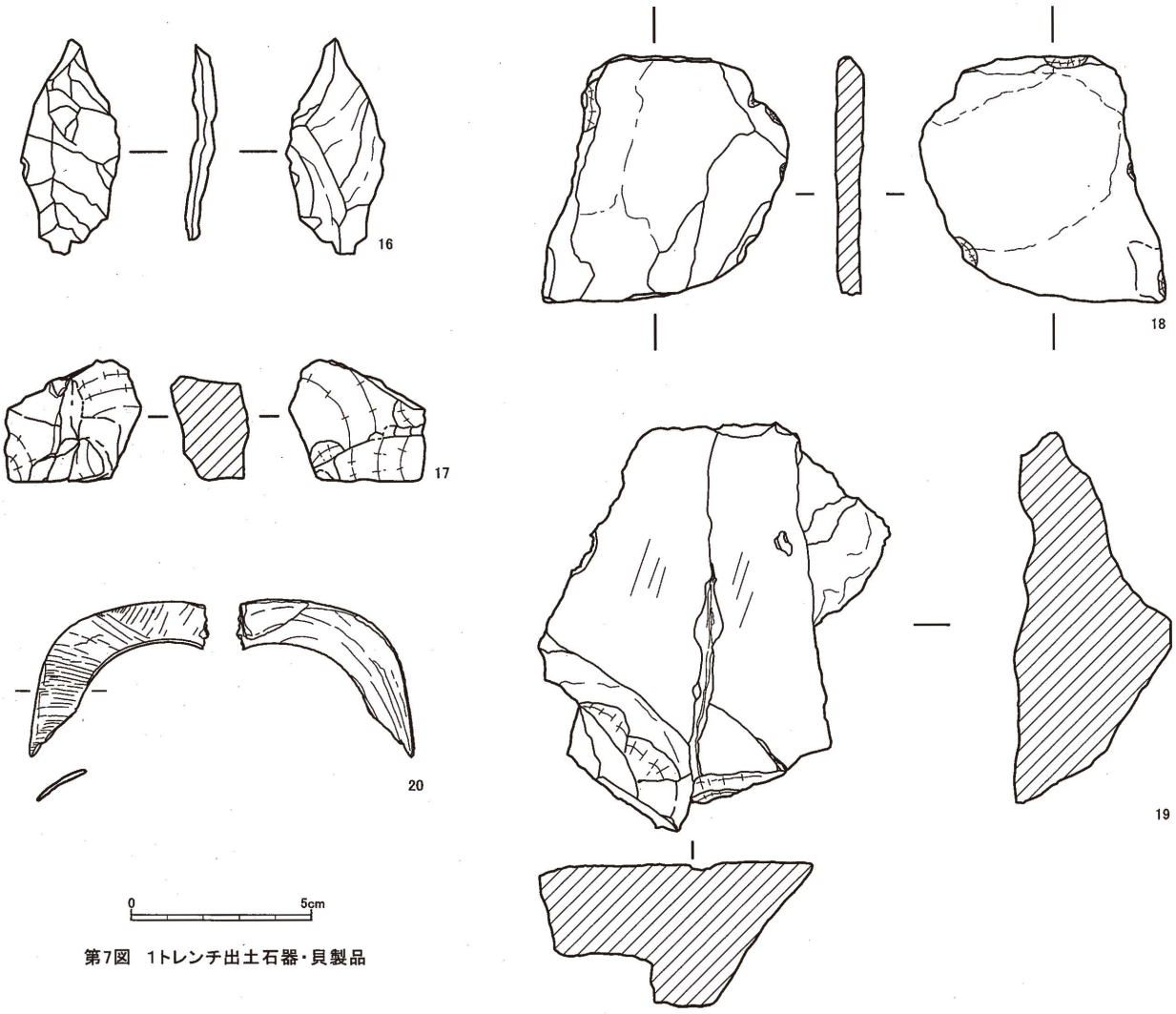
12は薄手の土器で、斜位の刺突が施される。13はやや厚手の土器で、口唇部には押し引き状の刺突が施される。口縁部上端と下端に浅い刺突が連続して施される。中間部分は無文である。

底部（第6図14・15）

14は尖底の一部で、15はやや厚手の平底である。

石器（第7図16～19）

16・17はチャートの剥片である。16は縦長でかなり薄手である。表裏面に加工痕は認められない。18は右縁辺が鋭く、刃部として使用されたと考えられる。スクレイパーとしておきたい。



第7図　1トレンチ出土石器・貝製品

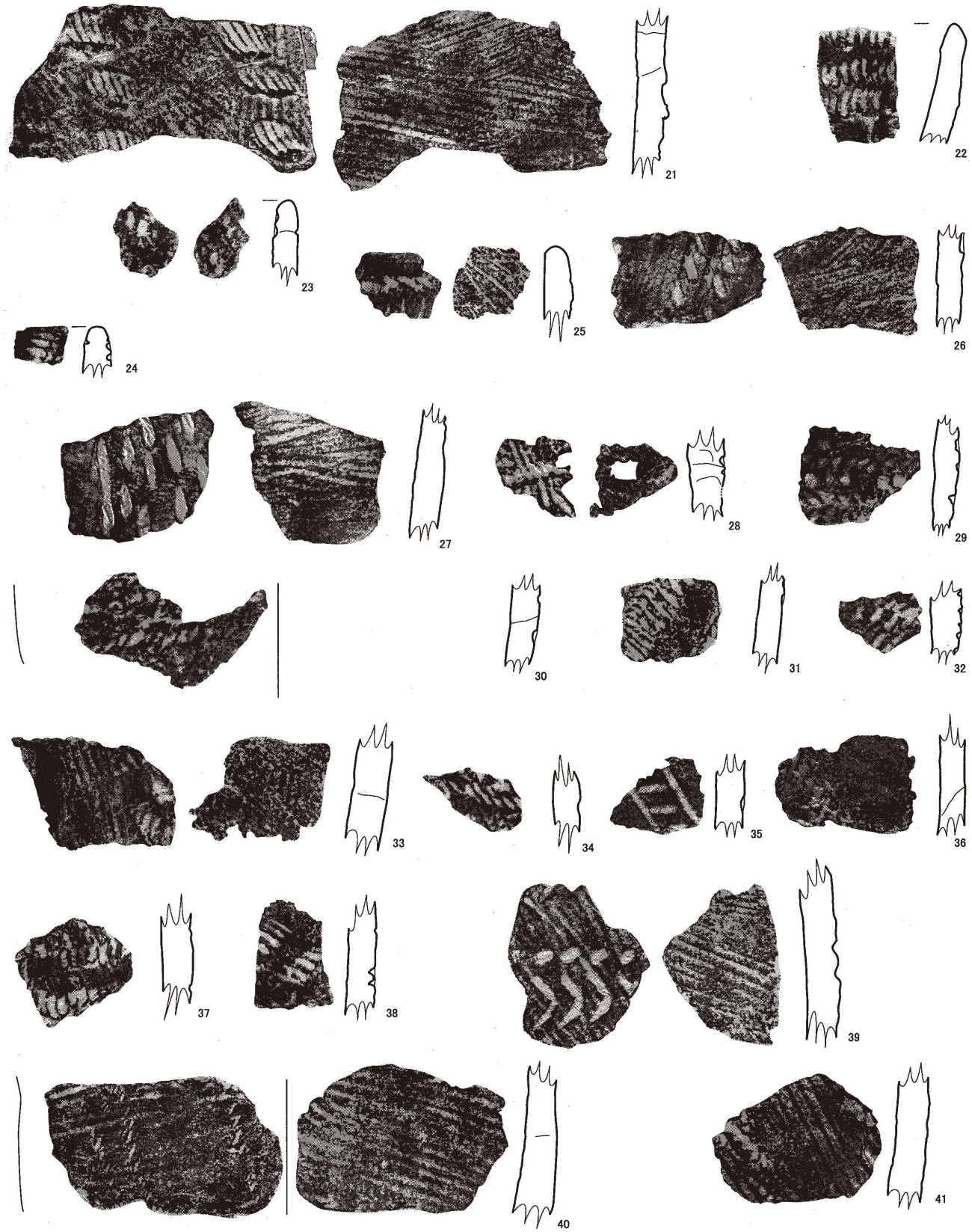
19は上面にわずかな平滑面が形成されており、研磨痕が若干みられる。台石としておきたい。右側は節理に沿って破断している。

貝製品（第7図20）

20は貝輪である。残存部分で長さ4.40cm、幅5.02cmを測る。内外面とも保存状態はあまりよくなく、細かい凹凸や剥離がみられる。素材はゴホウラ・アツソデガイなどスイショウガイ科のいずれかと推定される。

2．2トレンチ

196番地2の砂丘側南北方向に1.8m×4.5mの範囲で設定したトレンチである。重機を使用し、掘り下げを行ったところⅣ層から自然遺物等の出土が確認され始めたが、砂層に締まりがなく撹乱層の可能性が考えられたためⅤ層途中まで堆積や遺物の出土状況を確認しながら慎重に掘り下げた。Ⅴ層途中から人力での作業に切り替え、北側半分を地山面まで掘り下げた。Ⅳ層からⅩ層が遺物包含層であり、いずれも軽石を多く含む。自然遺物は貝類が最も多く、魚骨・獣骨等も比較的多く含む。



第8図　2トレンチ出土土器(1)

(1)遺物

土器

Ⅰ類a(第8図22～28・31～38)

22・23・24・25は口縁部片で、表面には箆状工具による沈線が施される。22は外傾する口縁部片で、口唇部は舌状を呈する。文様は、表面に3条と裏面に1条施される。23・24は僅かではあるが

両面に文様が見受けられる。25は直口する口縁部片で、口唇部は丸いつくりとなる。表面に施された沈線は、残存からみて「ハ」字状を形成するものと考えられる。裏面にはシャープな沈線文が施される。26はやや厚手の胴部片である。下方向に施された沈線文が2条みられる。27は26と類似した沈線文と考えられる。裏面には条痕の調整痕が認められる。28・31・32・34は胴部片である。28は縦位沈線文＋刺突文？が施される。焼成は不良で、混入物として白色粒が見受けられる。31・32は沈線文が斜位に施される。34は「ハ」字状の沈線文が施される。33・35・36・37・38は厚手の胴部片である。表面にみられる沈線文は、いずれも同じ方法で施されたものと考えられる。

Ⅰ類b（第8図21・40・41）

21は厚手の胴部片である。両面とも条痕で器面調整がなされ、表面にみられる貝殻文は器面調整後に二枚貝を上→下方向に施したものと考えられる。焼成は良好で、混入物は白色粒の他にも金雲母が含まれる。40・41は胴部片で、表面には二枚貝を使用して施した文様が3条ないし4条みられる。

Ⅰ類c（第8図29・30・39）

30・39は、表面に刺突文を施した土器である。39は刺突文＋沈線文が施されている。
29は刺突文＋沈線文が施されているが、39よりも施文は浅い。

Ⅰ類d（第9図42・43）

42・43は、a～cの文様が施文されずに、条痕文が残存する土器である。

Ⅲ類（第9図44）

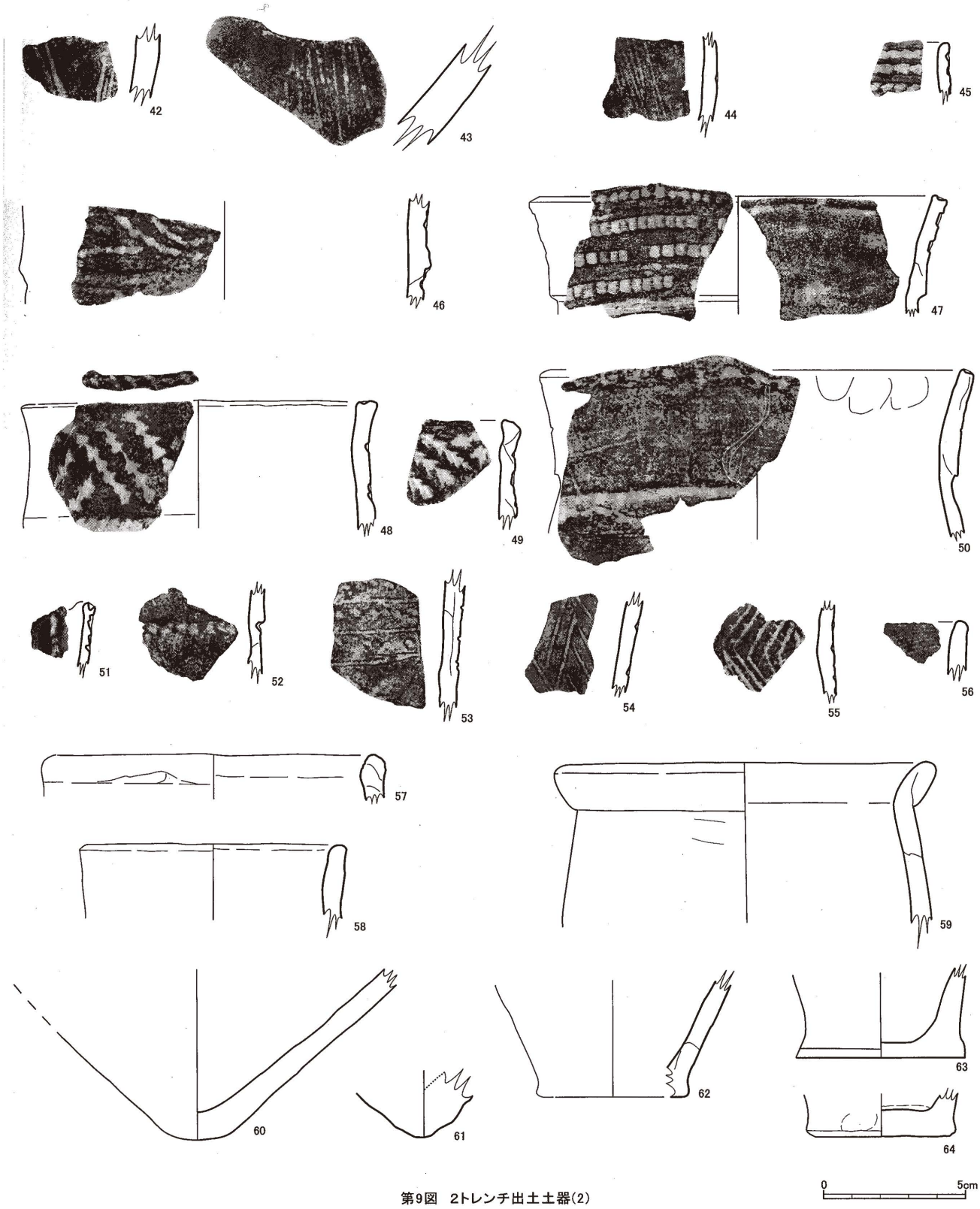
44は薄手の胴部片で、縦位に細沈線が数条施される。

Ⅳ類（第9図45～50）

45・46・48・49は口縁部片で、先端の尖った工具による押引きが施される。46は籠目状文様の一部が確認できる。47は先端が平たい工具による横位の押引きが3条施される。内面にはオサエ痕が明瞭に残る。焼成は良好である。48は口縁部がやや外反する器形で、幅広の工具による3条組と考えられる斜位の刺突が交互に施される。肥厚部下端には横位に連続刺突が施され、口唇部にも三角形状の刺突が施される。49は三角形状の刺突が施される。48と類似した文様構成と考えられる。50はやや外反する肥厚口縁部である。文様は、階段状の沈線が間隔をおいて施され、口唇部には刺突が施される。沈線のみの文様であるが、階段状の文様や口縁部に明瞭な肥厚を有する特徴から本類に含めた。

Ⅵ類（第9図51～53）

51は山形口縁の頂部付近で縦位の押引きが施される。52は口縁部文様帯下部に横位の刺突文が施される。53は横位の沈線区画内に連続した刺突文が施される。



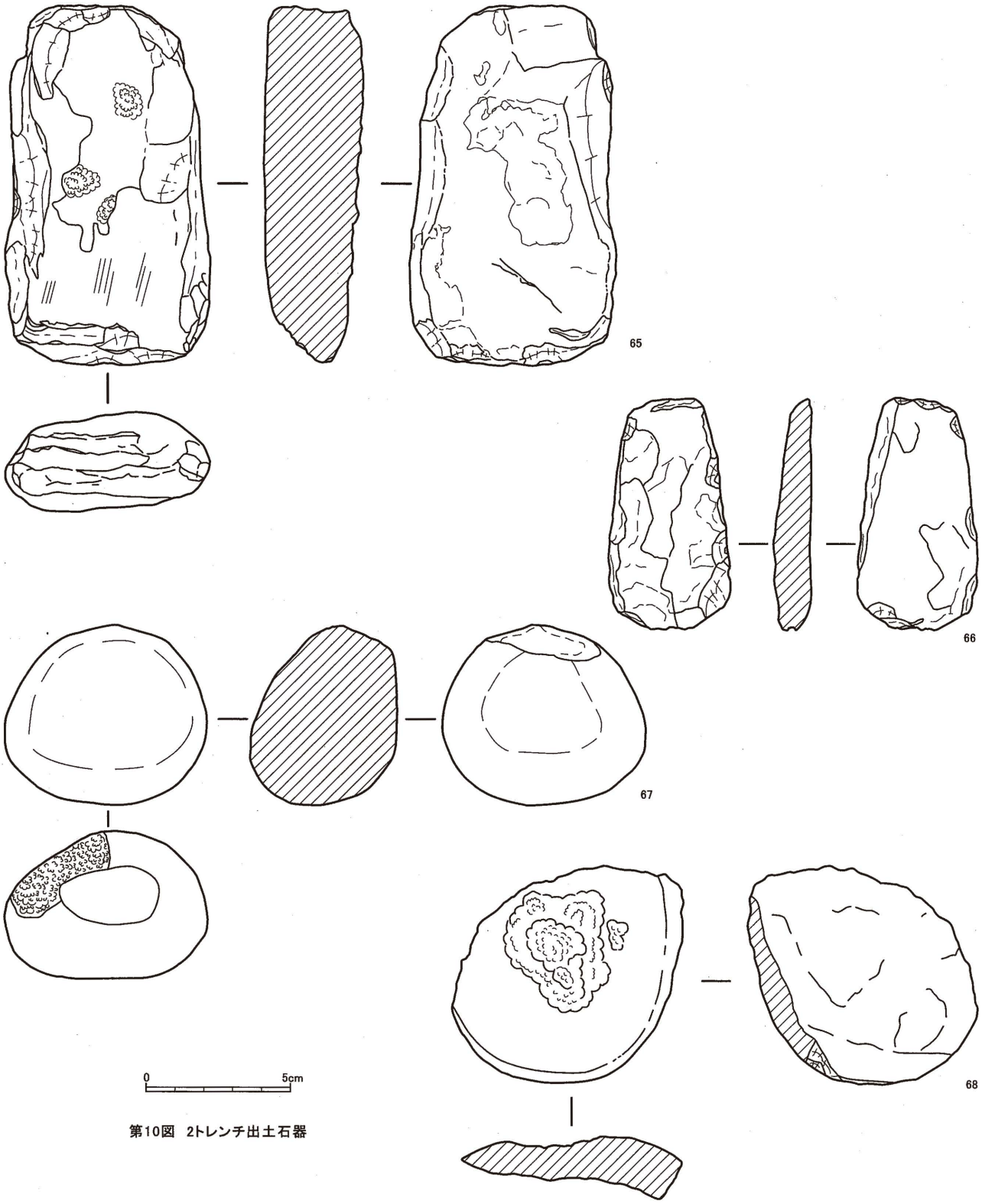
第9図　2トレンチ出土土器(2)

Ⅶ類（第9図54・55）

54は沈線による綾杉文が施される。調整は丁寧で焼成も良好である。55は数条の沈線による文様が施される。内面の調整は丁寧である。

Ⅸ類（第9図56～58）

56・57・58は無文の口縁部片で器面には工具による調整痕が残る。いずれも焼成は良好である。



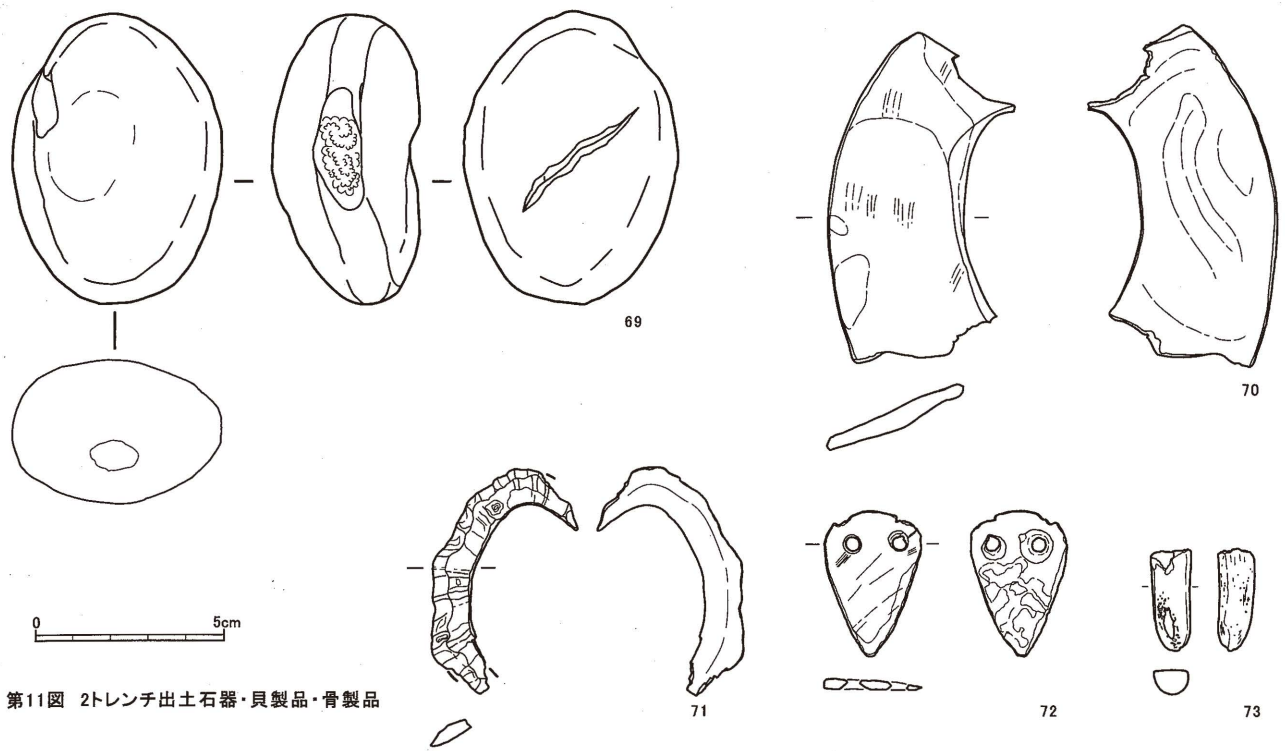
第10図　2トレンチ出土石器

X類（第9図59）

59は無文で口縁部が肥厚しやや外反する器形である。調整は丁寧で焼成も良好である。

底部（第9図60～64）

60・61は尖底である。60は2㎜～3㎜の鉱物粒を多く含み、焼成は比較的良好である。62・63・64は平底である。62は平底で外面に縦方向の調整痕がみられる。63は泥質の胎土で金雲母を多く含む。焼成は良好である。



第11図　2トレンチ出土石器・貝製品・骨製品

石器（第10図・第11図69）

65・66は石斧である。65は砂岩を素材とし、正面は敲打及び研磨により丁寧に整形されている。側面及び背面は、剥離及び敲打痕が認められる。刃部は僅かに刃先が残る程度で、大半は打欠により破損している。66は扁平な礫を素材とした打製石斧である。左縁辺部に敲打痕による剥離が顕著にみられる。67は花崗岩の円礫を素材とした敲石である。68は砂岩を素材とした凹石の破損品である。69は緑色片岩の円礫を素材とした敲石で、側面に敲打痕が認められる。

貝・骨製品（第11図70～73）

70は全形が不明であるが貝輪の可能性がある。残存部分で長さ9.80cm、幅5.12cmを測る。外面や縁辺部はよく研磨されている。71はオオツタノハの貝輪と考えられる。残存部分で長さ6.05cm、幅3.82cmを測る。破損品・未成品の可能性がある。72はサメ歯模造品と考えられる。長さ3.85cm、幅2.58cmを測る。2カ所の穿孔は表裏両面から施される。上縁には左右それぞれに抉りが入れられている。全体的に丁寧に研磨されているが、裏面の一部では凹凸が顕著にみられる。素材は不明であるが比較的重量がある。73はイノシシの骨製と考えられ、先端に研磨が施される。残存部分で長さ2.72cm、幅1.08cmを測る。

3．3トレンチ

192番地3の砂丘側東西方向に1.8m×4mの範囲で設定したトレンチである。重機により掘り下げたところ撹乱状況が認められた。地表から約1.8mで掘り下げを中止し、写真により記録した後に埋め戻した。後に4トレンチの状況や地元住民からの聞き取りにより、かつて大雨時に地下水脈があふれ出し当該地点付近を水が流れていたとの情報があり、これにより撹乱された部分である可能性が高いと考えられる。

4．4トレンチ

192番地3の南側、東西方向に1.8m×4.5mの範囲で設定したトレンチである。トレンチ東端部は地層の撹乱が認められ、3トレンチと同様に水流の影響によるものと考えられる。Ⅴ層～Ⅶ'層が遺物包含層であり、部分的に暗褐色を呈する箇所も認められた。いずれの層も軽石を含む。自然遺物は、他のトレンチに比べ獣骨の出土量が多い。砂層が厚く堆積しておりⅦ'層の途中で掘り下げを中止した。下層の状況を把握しておくためにサブトレンチを設定し掘り下げたところ、地表から約3.5mまで砂層の堆積と少量の遺物が確認された。地山までの深さは不明である。

(1)遺物

土器

Ⅰ類a（第12図74・75・78・79・83）

74は、厚手の胴部片である。沈線文は横位に鋭く施され、条痕の調整も明瞭にみられる。75は直口の口縁部片で、口唇部は若干尖ったつくりである。両面に斜位沈線文が2～3条施されている。78・79は、いずれも表面に沈線文が施される。79の下端には左下方向に進むと思われる沈線文が若干認められる。

Ⅰ類b（第12図76・77・80・84）

80は薄手の口縁部片で、貝殻文＋刺突文が施される。76・77・84はいずれも胴部片で、表面に貝殻文が施されている。84は貝殻文を2～3条一組で施文する際に、間隔を設けていることがわかる資料である。

Ⅰ類c（第12図81・82・83）

81は幅広の刺突文が2条施されている。施文方向は、上→下に向けた痕跡が明瞭に残る。82は横位に刺突文を施したものである。83は81・82に比べ、小型の刺突文が施されている。

Ⅰ類d（第12図85・86）

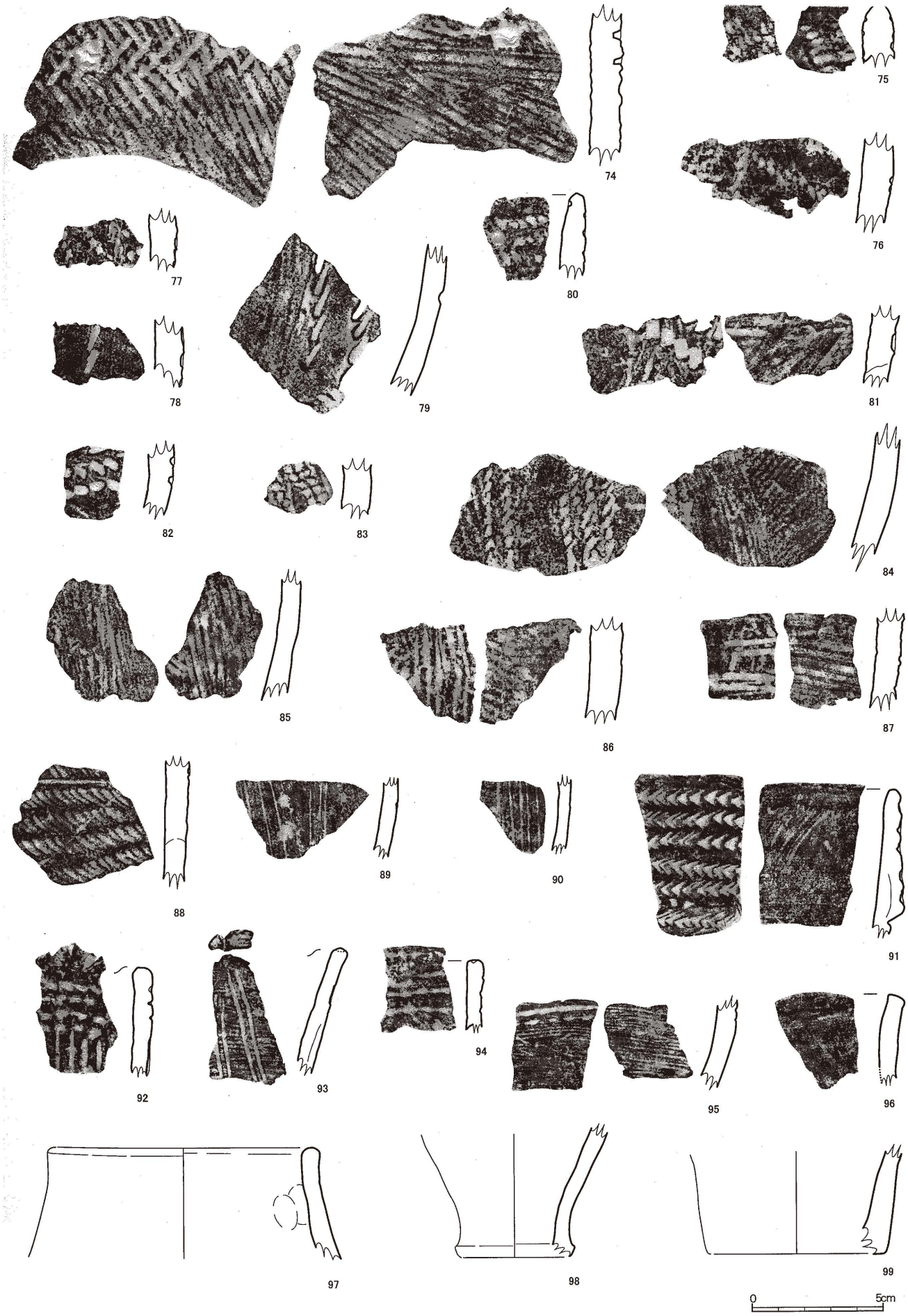
85・86は表面に条痕文のみが残存するものである。85の表面にみられる条痕文は摩耗しているが、裏面のものは明瞭に残る。

Ⅱ類（第12図87・88）

87は表面に細い沈線文を施した土器で、縦横に文様が組み合わされている。88は8と類似した文様が施されている。焼成は良好で、胎土に金雲母などが含まれる。Ⅰ類の文様構成の範疇に含まれないことから、別型式の土器である可能性が考えられる。

Ⅲ類（第12図89・90）

89・90は薄手の胴部片で数条の細沈線が施される。調整は内外面とも丁寧で焼成も良好である。



第12図　4トレンチ出土土器

Ⅳ類（第12図91）

91は肥厚する口縁部で、横位の押引きは肥厚部下位にまで及ぶ。調整は丁寧で焼成も良好、堅緻である。内面は工具による調整痕が僅かに残る。

Ⅵ類（第12図92）

92は山形口縁の頂部で、口唇部に深い刺突が施される。横位に深い刺突が4条施され、下位に縦位の沈線がみられる。焼成は良好である。

Ⅶ類（第12図93）

93は山形口縁の破片で、口唇部に幅広で浅い刺突が施される。外面には工具による横方向の調整痕がみられる。文様は2条1組の沈線が斜位に施される。

Ⅷ類（第12図94・95）

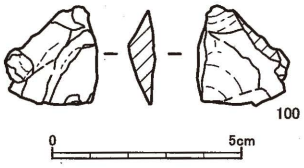
94は横位に浅い押引き状の短沈線が連続して施される。口唇部には刺突が施される。調整は丁寧で焼成も良好で堅緻である。95は押し引き状の刺突が横位に施される。内外面とも工具による調整痕が顕著にみられる。焼成は良好で堅緻である。

Ⅸ類（第12図96・97）

96は無文の口縁部片で、胎土に黒色の鉱物粒を含む。調整は丁寧で焼成も良好である。97は口縁部から「ハ」の字状に広がる器形である。調整は丁寧で焼成は良好、堅緻である。

底部（第12図98・99）

98は平底で、胴部に向かって広がる器形である。胎土には金雲母、黒色粒を含み、焼成は良好である。99はやや厚手の平底である。内外面とも調整は丁寧である。



第13図　4トレンチ出土石器

石器（第13図100）

100はチャートの剥片である。

5．5トレンチ

192番地3の内陸側東西方向に1.8m×5mの範囲で設定したトレンチである。トレンチ東端部は約0.8m～1.0mで地山である石灰岩盤や赤褐色粘質土に達する。地山面で2基のピットが検出された。地山面は西側に向かい緩やかに傾斜し、トレンチ西端部では地表面から約1.4mを測る。西側部分は1トレンチと同様に、地山直上に赤褐色粘質土と砂が混在した層を形成している。Ⅴ層～Ⅶ層が遺物包含層で軽石を多く含む。自然遺物は、貝類がみられるが出土量は少ない。

(1)遺構

トレンチ東側にピットが2基確認された。ピット1は長径27㎝、深さ10cm、ピット2は長径32㎝、深さ10cmである。半截し掘り下げを行った。褐色の埋土中から石灰岩の小礫が出土したが、遺物は確認されなかった。

(2)遺物

土器

Ⅰ類a(第16図101・102・105)

101は厚手の土器である。摩耗が激しく、表面に施された沈線文が僅かに認められる。
102は薄手の土器で、沈線文が施されている。105は表面に施された沈線文が明瞭に残存する。

Ⅰ類b(第16図104)

104は直口を呈する口縁部片で、口唇部は舌状のつくりになっている。
両面に貝殻文が施されている。

Ⅰ類c(第16図103)

103は厚手の土器である。横位に施された刺突文の下に、小型の文様が施されている。

Ⅵ類(第16図106・107)

106は山形口縁部の頂部である。文様は、沈線と刺突により構成される。胎土は細かく焼成は比較的良好である。泥質の胎土で、金雲母・黒色鉱物粒を多く含む。107は口縁上端部に横位の刺突が廻り、斜位の沈線文と組み合わされる。1㎜程度の白色鉱物粒を多く含む。器面はやや粗い。

Ⅶ類(第16図108)

108は横位・縦位の沈線区画内に羽状の沈線が施される。胎土に1㎜程度の白色鉱物粒を多く含む。

Ⅷ類(第16図109～111)

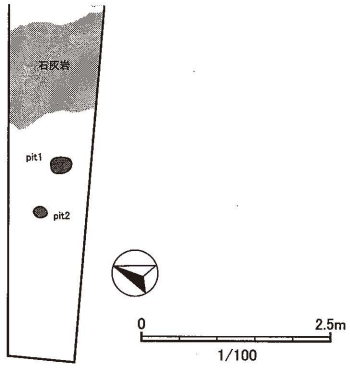
109・110は浅い短沈線が横位に連続して施される。焼成はやや不良で器面は磨滅し文様が不明瞭である。111は2点1組の刺突が横位に施される。3点とも1㎜～2㎜程度の白色鉱物粒を多く含む。

Ⅸ類(第16図112)

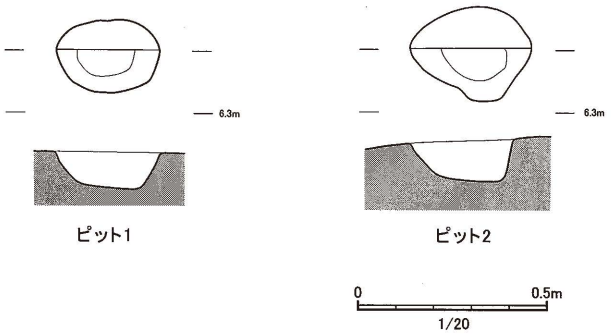
112は薄手の山形口縁部片である。内面はオサエ痕が明瞭に残る。

Ⅹ類(第16図113)

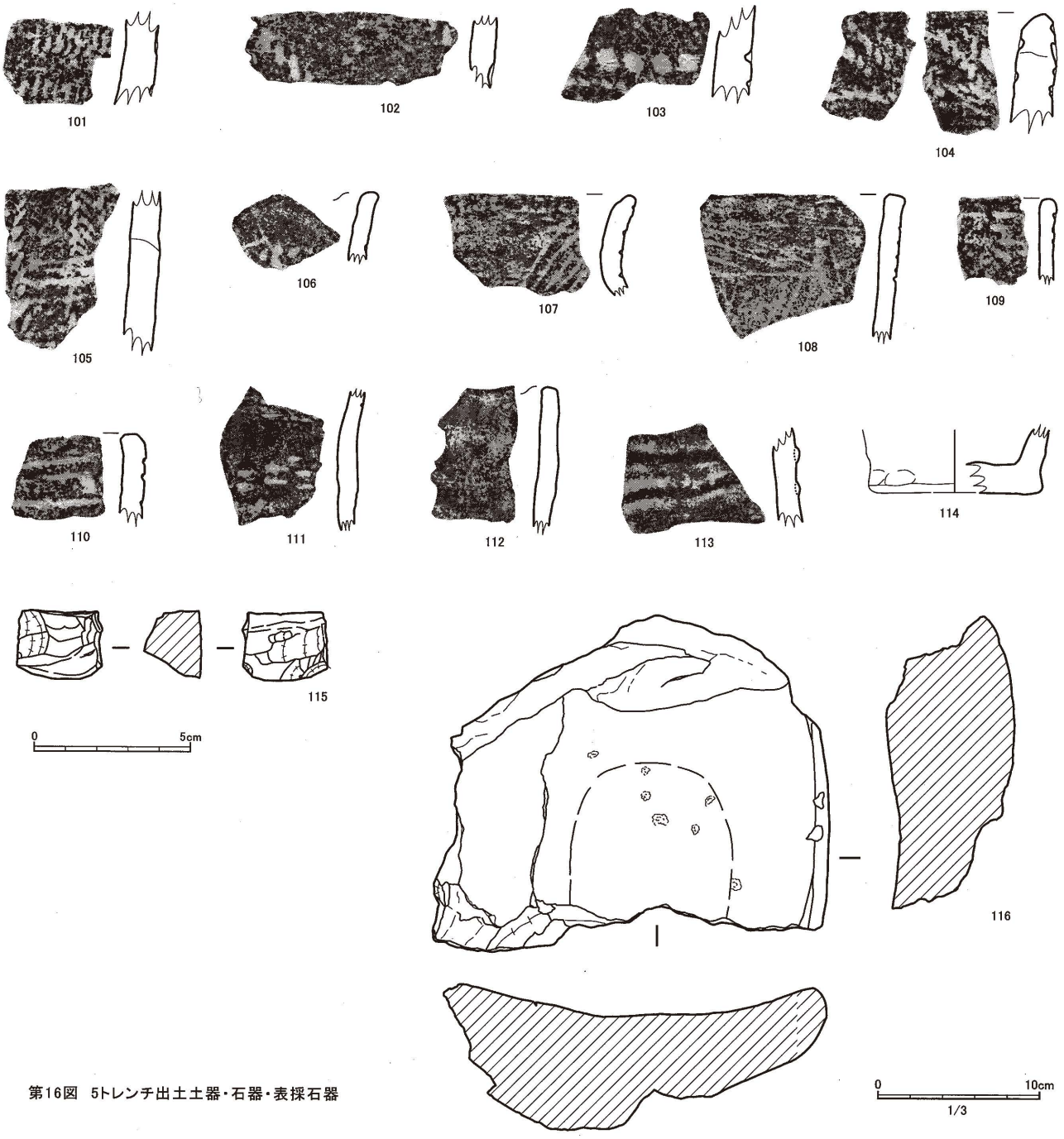
113は2条の突帯が貼り付けられる。色調は黒色を呈し、胎土は泥質で、金雲母・黒色鉱物粒を多く含む。



第14図　5トレンチ遺構配置図



第15図　ピット1・ピット2



第16図　5トレンチ出土土器・石器・表採石器

底部（第16図114）

114は平底で、胎土に1㎜程度の白色鉱物粒を多く含む。外面にはオサエ痕が明瞭にみられる。

石器（第16図115）

115はチャート石核である。

表採資料（第16図116）

116は石皿である。厚さ6cmほどの大型礫を素材としており、上面には窪みが形成されている。

6．6～9トレンチ（第2表）

今回、畑地改良予定地に隣接する地点について試掘調査を実施した。その結果、4トレンチの南側に設定した6トレンチまでは遺物包含層の残存が確認された。7トレンチ及び、その東側への延長線上に設定した8トレンチ・9トレンチでは遺構・遺物とも確認されなかった。6トレンチ付近が遺跡の南端部となると思われる。

第2表　試掘トレンチ一覧表

トレンチ番号	規模（m）	面積（㎡）	包含層までの深さ（m）	地山までの深さ（m）	備　考
6	1.6×5.5	8.8	3.3	－	
7	1.6×8	12.8	－	2.1	
8	2.2×4	8.8	－	0.3	撹乱部分あり
9	1.8×7.5	13.5	－	0.25	

7．自然遺物

貝類遺体（第7表）

貝類遺体についても、ピックアップ法（現地採集資料）により得られたものについて種の同定を行った。その結果、海産腹足類26科105種、海産二枚貝類10科22種、陸産貝類2科3種が確認された。ただし、海浜へ打ち上げられた死貝等と廃棄によるものとの選別は行っておらず、詳細な検討は今後の課題となる。

脊椎動物骨遺体（第8表）

脊椎動物骨遺体については、ピックアップ法（現地採集資料）により得られたものについて種の同定を行った。その結果、魚類・爬虫類・哺乳類が確認された。

〔参考文献〕(五十音順)

岡本一志　1988『沖縄海中生物図鑑』第4巻　新星図書出版

岡本一志　1988『沖縄海中生物図鑑』第5巻　新星図書出版

金子浩昌　1996「動物遺体（軟体動物を除く）」『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県教育委員会

金子浩昌・久貝弥嗣　2006「動物遺体」『新城下原第二遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター

黒住耐二　2009「沖永良部島友留遺跡から得られた貝類遺体」『友留遺跡』知名町教育委員会

黒住耐二　2006「貝類遺体からみた沖永良部島住吉貝塚の特徴」『住吉貝塚』知名町教育委員会

菅原広史　2013「第3章調査の方法と成果 第4節出土遺物と分析 5.魚類遺体」『白保竿根田原洞窟遺跡』沖縄県立埋蔵文化センター

長谷川善和・野苅家広　1979「ナガラ原西貝塚哺乳類遺骸」『伊江島ナガラ原西貝塚』伊江村教育委員会

樋泉岳二　1995「遺跡産魚骨同定の手引き(Ⅱ)―魚類の骨格構成と同定部位―」『動物考古学』第5号　動物考古学研究会

樋泉岳二　2006「西長浜原遺跡の脊椎動物遺体」『西長浜原遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター

松井　章　編　2006『動物考古学の手引き』奈良文化財研究所埋蔵文化財センター

第3表　土器観察表(1)

挿図	番号	トレンチ	層	部位	焼成	胎土 金雲母	胎土 混入物	胎土 分類	色調 表	色調 裏	口唇施文	調整等 外器面	調整等 内器面	備考
第6図	1	1T	7	口縁部	○	－	○	Ⅰa	暗褐7.5YR3/3	暗褐7.5YR3/3	○	沈線	沈線	白色粒子含む
	2	1T	－	口縁部	△	△	◎	Ⅰa	黒7.5YR3/1	黒7.5YR3/2	－	沈線	－	1mm以下の粒子多く含む
	3	1T	7	胴部	○	△	◎	Ⅰa	暗褐7.5YR3/4	暗褐7.5YR3/4	－	ナデ・短沈線	－	1mm以下の粒子多く含む
	4	1T	7	口縁部	△	－	◎	Ⅰa	極暗褐7.5YR2/3	暗褐7.5YR3/4	○	ナデ・沈線	ナデ・沈線	
	5	1T	－	口縁部	△	△	○	Ⅰa	黒褐7.5YR3/2	暗褐7.5YR3/4	－	沈線	ナデ・沈線	羽状文
	6	1T	7	胴部	△	－	○	Ⅰb	赤褐5YR4/8	暗赤褐5YR3/4	－	貝殻	条痕	
	7	1T	7	胴部	○	△	◎	Ⅰa	暗褐7.5YR3/4	褐7.5YR4/6	－	短沈線・ナデ	ナデ	
	8	1T	7	胴部	△	△	○	Ⅱ	赤褐5YR4/8	赤褐5YR4/8	－	爪状	ナデ	
	9	1T	7	口縁部	○	△	◎	Ⅳ	暗褐7.5YR3/3	暗褐7.5YR3/4	○	押引	オサエ・ナデ	
	10	1T	7	口縁部	○	－	◎	Ⅴ	褐7.5YR4/6	褐7.5YR4/3	－	ナデ・刺突	ナデ	白色粒子多く含む
	11	1T	7	口縁部	○	△	◎	Ⅳ	褐7.5YR4/4	黒褐7.5YR3/2	○	ナデ・押引	オサエ・ナデ	白色粒子含む
	12	1T	－	胴部	○	○	○	Ⅵ	暗褐7.5YR3/4	褐7.5YR4/6	－	ナデ・刺突	オサエ・ナデ	
	13	1T	－	口縁部	△	－	◎	Ⅵ	暗褐7.5YR3/4	暗褐7.5YR3/4	○	ナデ・刺突	オサエ・ナデ	
	14	1T	7	底部	△	△	◎	底	赤褐5YR4/6	赤褐5YR4/6	－	ナデ	オサエ	
	15	1T	7	底部	○	△	◎	底	暗褐7.5YR3/3	褐7.5YR4/6	－	工具ナデ	ナデ	平底
第8図	21	2T	7	胴部	○	△	◎	Ⅰb	赤褐5YR4/6	にぶい赤褐5YR4/4	－	条痕・貝殻	条痕	
	22	2T	5	胴部	△	○	◎	Ⅰa	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	－	オサエ・ナデ・沈線	オサエ・工具・ナデ	白色粒含む
	23	2T	サブトレ	口縁部	△	－	○	Ⅰa	黒褐7.5YR2/2	黒褐7.5YR2/2	?	ナデ・沈線	ナデ	
	24	2T	7	口縁部	○	△	○	Ⅰa	黒褐7.5YR3/2	暗褐7.5YR3/3	*	ナデ・沈線	ナデ・刺突	白色粒含む
	25	2T	7	口縁部	○	△	○	Ⅰa	灰褐7.5YR4/2	褐7.5YR4/4	*	沈線	斜沈線	
	26	2T	6	胴部	◎	△	○	Ⅰa	暗褐7.5YR3/3	褐7.5YR4/6	－	工具・ナデ・沈線	工具・ナデ	
	27	2T	6	胴部	○	△	◎	Ⅰa	暗褐7.5YR3/3	褐7.5YR4/4	－	ナデ・短沈線	条痕	黒色粒含む
	28	2T	6	胴部	○	－	◎	Ⅰa	暗褐7.5YR3/4	褐7.5YR4/3	－	条痕・沈線	条痕・ナデ	白色粒含む
	29	2T	6	胴部	○	－	○	Ⅰc	褐7.5YR4/4	暗褐7.5YR3/4	－	ナデ・刺突	ナデ	沈線含む
	30	2T	9	胴部	△	△	◎	Ⅰc	赤褐5YR4/8	暗褐7.5YR3/4	－	刺突	ナデ	
	31	2T	6	胴部	○	△	○	Ⅰa	褐7.5YR4/6	褐7.5YR4/4	－	ナデ・沈線	工具・ナデ	
	32	2T	6	胴部	○	△	○	Ⅰa	暗褐7.5YR3/4	褐7.5YR4/4	－	沈線	ナデ	
	33	2T	6	胴部	○	○	◎	Ⅰa	灰褐7.5YR4/2	暗褐7.5YR3/3	－	条痕・ナデ・沈線	条痕・ナデ	黒色粒含む
	34	2T	7	胴部	○	△	○	Ⅰa	暗褐7.5YR3/4	黒褐7.5YR3/2	－	貝殻・沈線	ナデ	羽状文？
	35	2T	6	胴部	○	－	○	Ⅰa	褐7.5YR4/3	褐7.5YR4/6	－	ナデ・沈線	ナデ	
	36	2T	7	胴部	○	○	◎	Ⅰa	暗褐7.5YR3/4	暗褐7.5YR3/4	－	ナデ・沈線	ナデ	
	37	2T	6	胴部	○	△	○	Ⅰa	褐7.5YR4/6	褐7.5YR4/4	－	沈線	ナデ	
	38	2T	6	胴部	○	－	◎	Ⅰa	褐7.5YR4/4	灰褐7.5YR4/2	－	ナデ・沈線	ナデ	
	39	2T	7	胴部	○	△	◎	Ⅰc	黒褐7.5YR3/2	黒褐7.5YR3/2	－	条痕・刺突	条痕	沈線含む
	40	2T	7	胴部	○	△	◎	Ⅰb	褐7.5YR4/3	褐7.5YR4/6	－	条痕・ナデ・貝殻	条痕・ナデ	
	41	2T	6	胴部	○	△	◎	Ⅰb	黒褐7.5YR3/2	暗褐7.5YR3/4	－	条痕・ナデ・貝殻	ナデ	
第9図	42	2T	6	胴部	○	－	◎	Ⅰa	暗褐7.5YR3/4	暗褐7.5YR3/3	－	ナデ・沈線	ナデ・条痕	
	43	2T	7	胴下部	○	○	○	Ⅰd	褐7.5YR4/6	黒褐7.5YR3/1	－	条痕	ナデ	
	44	2T	5	胴部	◎	△	◎	Ⅲ	灰褐7.5YR5/2	灰褐7.5YR4/2	－	ナデ・沈線	オサエ・ナデ	
	45	2T	5	口縁部	◎	△	△	Ⅳ	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	*	工具・ナデ・押引	オサエ・ナデ	
	46	2T	5	口縁部	○	△	◎	Ⅳ	褐7.5YR4/6	褐7.5YR4/6	－	ナデ・押引	ナデ	扁平鉱物粒含む
	47	2T	5~6	口縁部	○	○	◎	Ⅳ	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	ナデ・押引	オサエ・ナデ	
	48	2T	5	口縁部	○	○	○	Ⅳ	灰褐7.5YR4/2	褐7.5YR4/6	○	ナデ・刺突	オサエ・ナデ	
	49	2T	7	口縁部	○	△	△	Ⅳ	にぶい褐7.5YR5/4	褐7.5YR4/4	△	工具・ナデ・押引	オサエ・ナデ	口唇施文不明瞭
	50	2T	5	口縁部	△	△	○	Ⅳ	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	ナデ・沈線	オサエ・ナデ	

第3表　土器観察表(2)

挿図	番号	トレンチ	層	部位	焼成	胎土			色調		口唇施文	調整等		備考
						金雲母	混入物	分類	表	裏		外器面	内器面	
第9図	51	2T	5	口縁部	○	−	△	Ⅵ	にぶい褐7.5YR5/3	明褐7.5YR5/6	○		オサエ・ナデ	
	52	2T	5	口縁部	○	○	○	Ⅵ	褐7.5YR4/3	褐7.5YR4/4	−		オサエ・ナデ	
	53	2T	4	口縁部	○	△	○	Ⅵ	にぶい褐7.5YR5/4	灰褐7.5YR4/2	−		ナデ	
	54	2T	4	口縁部	○	△	△	Ⅶ	灰褐7.5YR5/2	にぶい褐7.5YR5/3	−	ナデ・沈線	ナデ	
	55	2T	−	口縁部	○	△	△	Ⅶ	にぶい褐7.5YR5/3	明褐7.5YR5/6	−	ナデ・沈線	ナデ	調整丁寧
	56	2T	5	口縁部	◎	△	○	Ⅸ	明褐7.5YR5/6	褐7.5YR4/6	*	工具・ナデ	ナデ	
	57	2T	6	口縁部	○	−	△	Ⅸ	褐7.5YR4/6	褐7.5YR4/4	−	ナデ	条痕・ナデ	
	58	2T	5	口縁部	○	−	○	Ⅸ	明褐7.5YR5/6	にぶい褐7.5YR5/6	*	工具・ナデ	オサエ・ナデ	
	59	2T	6	口縁部	○	−	◎	Ⅹ	褐7.5YR4/3	褐7.5YR4/4	*	工具・ナデ	工具・ナデ	
	60	2T	6	底部	○	−	◎	底	橙5YR6/6	橙5YR6/6	−	工具ナデ	−	
	61	2T	6	底部	○	−	○	底	褐7.5YR4/6	暗褐7.5YR3/4	−	ナデ	−	白色粒含む
	62	2T	5	底部	○	○	◎	底	にぶい褐7.5YR5/4	明褐7.5YR5/6	−	工具・ナデ	オサエ・ナデ	
	63	2T	−	底部	◎	○	○	底	にぶい褐7.5YR5/4	灰褐7.5YR5/2	−	オサエ・ナデ	オサエ・ナデ	泥質
	64	2T	5	底部	○	△	○	底	褐7.5YR4/4	褐7.5YR4/4	−	オサエ・ナデ	オサエ・ナデ	
第12図	74	4T	7'	胴部	○	*	◎	Ⅰa	にぶい赤褐2.5YR4/4	暗赤褐2.5YR3/2	−	条痕・沈線	条痕	刺突文あり
	75	4T	6'~7	口縁部	△	*	◎	Ⅰa	にぶい赤褐2.5YR4/4	にぶい赤褐2.5YR4/4	*	ナデ・沈線	ナデ	
	76	4T	サブトレ	胴部	△	*	◎	Ⅰb	赤褐2.5YR4/6	灰赤2.5YR4/2	−	ナデ・貝殻	ナデ	
	77	4T	6	胴部	△	△	○	Ⅰb	赤褐10YR4/4	にぶい赤褐2.5YR4/4	−	貝殻	ナデ	
	78	4T	6	胴部	○	△	◎	Ⅰa	黒褐7.5YR3/1	赤褐2.5YR4/6	−	ナデ・短沈線	ナデ	
	79	4T	6'	胴部	○	−	○	Ⅰa	極暗褐7.5YR2/3	極暗褐7.5YR2/3	−	条痕・沈線	条痕・ナデ	
	80	4T	撹乱	口縁部	△	△	○	Ⅰb	赤褐2.5YR4/6	赤褐2.5YR4/6	*	貝殻	条痕・ナデ	
	81	4T	6'	胴部	△	△	○	Ⅰc	にぶい赤褐2.5YR4/4	赤褐10YR4/4	−	条痕・刺突	条痕・ナデ	
	82	4T	6'	胴部	△	*	◎	Ⅰc	灰褐5YR4/2	黒褐7.5YR3/2	*	刺突	ナデ	白色鉱物粒含む
	83	4T	6'	胴部	◎	△	△	Ⅰa	暗赤褐5YR3/4	暗赤褐5YR3/2	−	条痕・短沈線	工具ナデ	
	84	4T	6'~7	胴部	△	△	◎	Ⅰb	にぶい赤褐5YR4/4	暗赤褐5YR3/2	−	貝殻	条痕	
	85	4T	撹乱	胴部	○	*	○	Ⅰd	灰褐5YR4/2	赤褐5YR4/6	−	条痕	条痕	
	86	4T	6'~7	胴部	△	*	◎	Ⅰd	赤褐2.5YR4/6	赤黒2.5YR2/1	−	条痕	−	
	87	4T	6'	胴部	○	△	◎	Ⅱ	にぶい赤褐5YR4/3	にぶい赤褐5YR4/3	−	ナデ・沈線	条痕	別型式？
	88	4T	6	胴部	○	△	◎	Ⅱ	にぶい赤褐5YR4/3	赤褐5YR4/6	−	爪状	−	別型式？
	89	4T	6	胴部	◎	*	◎	Ⅲ	にぶい赤褐5YR5/4	暗灰褐2.5YR4/2	−	ナデ・沈線	ナデ	
	90	4T	6	口縁部	◎	△	○	Ⅲ	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	*	ナデ・押引	工具ナデ	東洞式
	91	4T	6	胴部	◎	△	△	Ⅳ	にぶい褐7.5YR5/3	明褐7.5YR5/6	−	ナデ・沈線	ナデ	前庭
	92	4T	6	口縁部	△	*	◎	Ⅵ	灰褐5YR4/1	灰褐10YR4/1	○	ナデ・刺突・沈線	オサエ・ナデ	
	93	4T	6	口縁部	○	*	○	Ⅶ	灰褐7.5YR4/2	にぶい赤褐5YR5/4	○	工具ナデ・沈線	オサエ	
	94	4T	6	口縁部	△	○	○	Ⅷ	にぶい橙7.5YR4/4	橙7.5YR6/4	○	ナデ・連点	ナデ	
	95	4T	6	胴部	◎	*	○	Ⅷ	明赤褐5YR5/6	明赤褐2.5YR5/6	−	工具ナデ・連点	工具ナデ	沖縄系
	96	4T	6	口縁部	◎	*	○	Ⅸ	にぶい橙7.5YR6/4	灰褐7.5YR4/1	*	ナデ	ナデ	調整丁寧
	97	4T	6	口縁部	◎	△	◎	Ⅸ	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	*	ナデ	ナデ・オサエ	
	98	4T	6	底部	◎	*	◎	底	灰黄褐10YR5/2	暗灰黄2.5YR5/2	−	ナデ	ナデ	黒色鉱物粒含む
	99	4T	6	底部	○	○	◎	底	明黄褐10YR6/6	橙5YR6/6	−	ナデ	ナデ	
第16図	101	5T	7	胴部	△	*	◎	Ⅰa	にぶい赤褐2.5YR4/4	にぶい赤褐2.5YR4/4	−	沈線	ナデ	
	102	5T	7	胴部	△	△	◎	Ⅰa	赤褐2.5YR4/6	黒褐5YR3/1	−	ナデ・沈線	ナデ	砂礫多い
	103	5T	6	胴部	△	*	◎	Ⅰc	明赤褐2.5YR3/6	黒褐5YR3/1	−	条痕・刺突	条痕・ナデ	
	104	5T	6	口縁部	△	*	◎	Ⅰb	黒褐5YR3/1	黒褐5YR3/1	*	貝殻	−	
	105	5T	6	胴部	○	△	○	Ⅰa	明赤褐2.5YR5/6	明赤褐2.5YR5/6	−	ナデ・沈線	ナデ	

第3表　土器観察表(3)

挿図	番号	トレンチ	層	部位	焼成	胎土			色調		口唇施文	調整等		備考
						金雲母	混入物	分類	表	裏		外器面	内器面	
第16図	106	5T	5	口縁部	○	◎	◎	Ⅵ	オリーブ褐2.5YR4/3	にぶい褐7.5YR5/3	*	沈線・刺突	−	黒・赤鉱物粒含む・泥質
	107	5T	5	口縁部	○	△	◎	Ⅵ	橙2.5YR6/6	明赤褐5YR5/6	*	刺突・沈線	−	
	108	5T	5	口縁部	△	○	◎	Ⅶ	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6	*	沈線	オサエ・ナデ	
	109	5T	5	口縁部	△	*	○	Ⅷ	明赤褐2.5YR5/6	明赤褐5YR5/6	*	連点	−	
	110	5T	5	口縁部	△	*	◎	Ⅷ	黒褐7.5YR3/1	赤褐5YR4/6	−	ナデ・連点	ナデ	扁平鉱物粒含む
	111	5T	6	胴部	○	△	◎	Ⅷ	にぶい赤褐5YR4/4	にぶい赤褐5YR4/4	−	ナデ・沈線	−	白色粒多く含む
	112	5T	5	口縁部	○	○	◎	Ⅸ	にぶい褐7.5YR5/4	褐7.5YR4/4	*	−	オサエ・ナデ	
	113	5T	7	胴部	○	*	◎	Ⅹ	黒7.5YR2/1	褐7.5YR4/4	−	突帯	ナデ	黒色鉱物粒含む
	114	5T	5	底部	○	△	◎	底	にぶい赤褐2.5YR5/4	明赤褐2.5YR5/6	−	オサエ	オサエ	

第4表　石器計測表

挿図	番号	器種	出土区	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
第7図	16	チャート片	1T	7	2.97	1.37	0.31	0.9	チャート	
	17	チャート片	1T	7	3.38	3.80	1.98	22.8	チャート	
	18	スクレイパー？	1T/サブトレ	7	6.70	6.80	0.79	510		
	19	台石	1T	5〜6	(12.10)	(9.65)	(4.32)			
第10図	65	石斧	2T	5〜6	12.40	7.13	3.40		砂岩	
	66	石斧	2T/サブトレ	7	8.10	4.17	1.25	66.5		
	67	敲き石	2T/サブトレ	8	6.20	7.90	5.10	327.0	花崗岩	
	68	くぼみ石	2T	7	(7.54)	(7.90)	(2.21)	149.8	砂岩	
第11図	69	敲き石	2T	5〜6	7.70	5.68	3.80	230.8	緑色片岩	
第13図	100	チャート片	4T	−	2.81	2.42	0.68	4.2	チャート	暗褐
第16図	115	チャート片	5T	6	2.20	2.25	1.83	13.5	チャート	
	116	石皿	表採	−	(16.08)	(18.05)	(5.72)			

第5表　貝製品計測表

挿図	番号	器種	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考
第7図	20	貝輪	1T	7	(4.40)	(5.02)	(0.18)	5.2	スイショウガイ科？	
第11図	70	貝輪	2T	7〜8	(9.80)	(5.12)	(0.54)	26.4	スイショウガイ科？	
	71	貝輪	2T	6	(6.05)	(3.82)	(0.50)	4.5	オオツタノハ	
	72	サメ歯状製品	2T	−	(3.85)	(2.58)	(0.31)	4.9		

第6表　骨製品計測表

挿図	番号	器種	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考
第11図	73	骨研磨品	2T	5〜6	(2.72)	(1.08)	(0.65)	1.3	イノシシ	

第7表　貝類遺体一覧表(1)

腹足綱 Gastropoda

アッキガイ科 Muricidae

名　称	学　名	生息場所類型
アカイガレイシ	Drupa rubusidaeus	I-3-a
キナレイシカイダマシ	Cronia ochrostoma	
キナレイシ	Mancinella mancinella	
コマドボラ	Muricodrupa fenestrata	
シラクモガイ	Thais armigera	I-3-a
シロイガレイシ	Drupa ricinus hadari	
シロクチキナレイシ	Mancinella echinulata	
シロレイシダマシ	Drupella cornus	
ツノテツレイシガイ	Mancinella hippocasanus	
ツノレイシ	Mancinella tuberosa	I-3-a
トゲレイシガイダマシ	Morula spinosa	
ヒロクチイガレイシ	Drupa clathrata	
ムラサキイガレイシ	Drupa morum	
レイシダマシ	Morula granulata	I-1-a

アマオブネガイ科 Neritidae

名　称	学　名	生息場所類型
アマオブネ	Nerita albicilla	I-1-b
ニシキアマオブネ	Nerita polita	I-0-c
フトスジアマガイ	Nerita costata	
イシダタミアマオブネ	Nerita helicinoides	I-0-a
キバアマガイ	Nerita plicata	I-0-a
オカイシマキガイ	Neritodryas subsulcata	

イトマキボラ科 Fasciolariidae

名　称	学　名	生息場所類型
リュウキュウツノマタ	Latirus polygonus	I-3-a

イモガイ科 Conidae

名　称	学　名	生息場所類型
アカシマミナシ	Conus generalis	
イボカバイモ	Conus distans	I-2-c
イボシマイモ	Conus lividus	I-2-a
オトヒメイモガイ	Conus otohimeae	
カラクサイモガイ	Conus caracteristicus	
ガクフイモガイ	Conus musicus	
キヌカツギイモ	Conus flavidus	
クロサンゴイモ	Conus klemae	
クロフモドキ	Conus dorreensis	I-2-c
コマダライモ	Conus chaldaeus	
サヤガタイモガイ	Conus fumigatus	I-1-a
サラサミナシモドキ	Conus vitulinus	I-2-a
シロセイロンイモ	Conus sponsalis nanus	
ナガシマイモ	Conus muriculatus	
ニシキミナシ	Conus striatus	I-2-c
ベニイタダキイモ	Conus balteatus	
ミカドミナシ	Conus imperialis	I-2-c
ヤキイモガイ	Conus magus	I-2-c
ヤナギシボリイモ	Conus miles	I-2-a
タマガキシシュウミナシ	Conus klemae	

ウミニナ科 Batillariidae

名　称	学　名	生息場所類型
ウミニナ	Batillaria multiformis	II-1-c
チイサウミニナ	Batillaria minima	
ヘナタリ	Cerithideopsilla cingulata	

オキニシ科 Batillariidae

名　称	学　名	生息場所類型
オキニシ	Bursa bufonia dunkeri	I-3-a
シワオキニシ	Bursa cruentata	

オナジマイマイ科 Bradybaenidae

名　称	学　名	生息場所類型
エラブマイマイ	Nesiohelix irrediviva	V-7

オニコブシガイ科 Turbinellidae

名　称	学　名	生息場所類型
オニコブシガイ	Vasum ceramicum	I-3-a
コオニコブシ	Vasum turbinellum	I-3-a

オニノツノガイ科 Cerithiidae

名　称	学　名	生息場所類型
カヤノミカニモリ	Clypeomorus bifasciata	
クリンニナ	Royella sinon	
トウガタカニモリ	Rhinoclavis sinensis	
メオニツノガイ	Cerithium echinatum	
オニノツノガイ	Cerithium nodulosum	I-2-c

ゴマフニナ科 Planaxidae

名　称	学　名	生息場所類型
ゴマフニナ	Planaxis sulcatus	I-1-a

サザエ科 Turbinidae

名　称	学　名	生息場所類型
コシダカサザエ	Turbo stenogyrus	I-2-a
スキヒメカタベガイ	Dentarene sarcina	
チョウセンサザエ	Turbo argyrostomus	I-3-a
ヤコウガイ	Turbo marmoratus	I-4-a

ショクコウラ科 Harpidae

名　称	学　名	生息場所類型
ショクコウラ	Harpa major	

シロネズミガイ科 Vanikoridae

名　称	学　名	生息場所類型
クビレシロネズミ	Vanikoro distans	

スズメガイ科 Hipponicidae

名　称	学　名	生息場所類型
カワチドリガイ	Antisabia foliacea	I-3-a

ソデボラ科 Strombidae

名　称	学　名	生息場所類型
アツソデ	Strombus thersites	
オハグロイボソデ	Strombus pipus	
クモガイ	Lambis lambis	I-2-c
ゴホウラ	Strombus latissimus	
スイジガイ	Lambis chiragra	I-2-c
フシデサソリガイ	Lambis scorpius scorpius	
マガキガイ	Strombus luhuanus	I-2-c
ムカシタモトガイ	Strombus mutabilis	I-2-c
ラクダガイ	Lambis truncata sebae	I-4-c

タカラガイ科 Cypraeidae

名　称	学　名	生息場所類型
アミメダカラ	Mauritia scurra scurra	
ウミナシジダカラガイ	Cypraea cernica cernica	
エダカラ	Blasicrura teres teres	
カノコダカラガイ	Cribrarula cribraria	
キイロダカラ	Erosaria moneta	I-1-a
ハチジョウダカラ	Mauritia mauritiana	
ハナマルユキ	Erosaria caputserpentis	I-3-a
ハナビラダカラ	Erosaria annulus	
ヒメホシダカラ	Lyncina lynx	I-2-a
ホシキヌタ	Lyncina vitellus	
ヤクシマダカラ	Mauritia arabica asiatica	I-2-a

タケノコガイ科 Terebridae

名　称	学　名	生息場所類型
ゾウゲタケ	Terebra felina	I-3-a

タマキビ科 Littorinidae

名　称	学　名	生息場所類型
イボタマタキビ	Nodilittorina pyramidalis	I-0-a
タマキビ	Littorina brevicula	

第7表　貝類遺体一覧表(2)

ツタノハガイ科 Patellidae

名　称	学　名	生息場所類型
ツタノハガイ	Scutellastra flexuosa	

ナンバンマイマイ科 Camaenidae

名　称	学　名	生息場所類型
エラブシュリマイマイ	Coniglobus mercatorius okinoerabuensis	
シュリマイマイ	Coniglobus mercatorius	V-8

ニシキウズガイ科 Trochidae

名　称	学　名	生息場所類型
アラスジサンショウガイモドキ	Euchelus quadricarinatus	
ウズイチモンジ	Trochus sacellus rota	
ギンタカハマ	Tectus pyramis	I-4-a
クレナイアシヤガマ	Species Roya sanguinea	
コマキアゲエビス	Clanculus bronni	
タカセガイ	Tectus (Rochia) maximus (Philippi)	I-4-a
ニシキウズガイ	Trochus maculatus	I-2-a
ムラサキウズ	Trochus stellatus	I-3-a

フジツガイ科 Ranellidae

名　称	学　名	生息場所類型
イサザボラ	Gyrineum pusillum	
シロシノマキ	Cymatium mundum	
ハチボラ	Cymatium vespaceum	
ホラガイ	Charonia tritonis	I-4-a

フネアマガイ科 Septariidae

名　称	学　名	生息場所類型
フネアマガイ	Septaria porcellana	

マクラガイ科 Pseudolividae

名　称	学　名	生息場所類型
サツマビナ	Oliva annulata	I-2-c

ミミガイ科 Haliotidae

名　称	学　名	生息場所類型
イボアナゴウ	Haliotis (Sanhaliotis) varia	I-2-c

ムカデガイ科 Vermetidae

名　称	学　名	生息場所類型
フタモチヘビガイ	Dendropoma maximum	

ユキノカサガイ科 Lottiidae

名　称	学　名	生息場所類型
コガモガサ	Lottia luchuana	

ヨメガカサガイ科 Nacellidae

名　称	学　名	生息場所類型
オオベッコウガサ	Cellana testudinaria	I-1-a
クルマガサ	Cellana radiata	
ヨメガカサ	Cellana toreuma	

二枚貝綱 Scaohopoda

アサジガイ科 Semelidae

名　称	学　名	生息場所類型
サメザラガイモドキ	Semele carnicolor	

イガイ科 Mytilidae

名　称	学　名	生息場所類型
サザナミマクラ	Modiolus flavidus	

オキナガイ科 Laternulidae

名　称	学　名	生息場所類型
ヒロクチソトオリガイ	Laternula (Exolaternula) truncata	

シオサザナミガイ科 Psammobiidae

名　称	学　名	生息場所類型
マスオガイ	Psammotaea elongata	II-1-c
リュウキュウマスオ	Asaphis violascens	II-1-c

シャコガイ科 Tridacninae

名　称	学　名	生息場所類型
トガリシラナミ	Tridacna noae	
ヒメジャコ	Tridacna crocea	I-2-a
ヒレジャコ	Tridacna squamosa	I-2-c
シラナミガイ	Tridacna maxima	I-2-a

チドリマスオ科 Mesodesmatidae

名　称	学　名	生息場所類型
イソハマグリ	Atactodea striata	I-1-c

ニッコウガイ科 Tellinidae

名　称	学　名	生息場所類型
アマサギガイ	Macalia bruguieri	
サメザラ	Scutarcopagia scobinata	I-2-c
リュウキュウシラトリ	Quidnipagus palatam	II-1-c

バカガイ科 Mactridae

名　称	学　名	生息場所類型
ユキガイ	Meropesta nicobarica	I-1-c

フネガイ科 Arcidae

名　称	学　名	生息場所類型
エガイ	Barbatia foliata	I-1-a
ハナエガイ	Barbatia stearnsii	
ベニエガイ	Barbatia fusca	I-2-a
リュウキュウサルボウ	Anadara antiquata	II-2-c

マルスダレガイ科 Veneridae

名　称	学　名	生息場所類型
アラヌノメ	Periglypta reticulata	I-2-c
シラオガイ	Circe scripta	
ヌノメガイ	Periglypta puerperal	II-1-c
ヒメイナミ	Gafrarium dispar	I-1-b

生息場所類型 Habitat

I：外洋ーサンゴ礁域
II：内湾ー転石域
III：河口干潟ーマングローブ域
IV：淡水域
V：陸域
VI：その他

0：潮間帯上部(Iではノッチ、IIIではマングローブ)
1：潮間帯中・下部
2：亜潮間帯上縁部(Iではイノー)
3：干瀬(IIにのみ適用)
4：礁斜面及びその下部
5：止水
6：流水
7：林内
8：林内・林縁部
9：林縁部
10：海浜部
11：打ち上げ物
12：化石

a：岩礁／岩盤
b：転石
c：礫／砂／泥底
d：植物上
e：淡水の流入する礫底

第8表　脊椎動物遺体一覧表

軟骨魚綱（板鰓亜綱） Chondrichthyes (Elasmobranchii)

名　称	学　名
イタチザメ	Galeocerdo cuvieri

硬骨魚綱（真骨類） Osteichthyes (Teleostei)

名　称	学　名
ハタ科	Serranidae
フエフキダイ科	Lethrinus
ベラ科	Labridae
ブダイ科	Calotomus
イロブダイ属	Bolbometopon
アオブダイ属	Scarus spp.
ハリセンボン科	Diodontidae

爬虫綱 RRPTILIA

名　称	学　名
ウミガメ類	Cheloniidae

鳥綱 AVES

名　称	学　名
鳥類同定不可	Order indet.

哺乳綱

名　称	学　名
イノシシ	Sus scrofa

第Ⅳ章　総括

神野貝塚では、1トレンチから5トレンチにおいて遺物包含層の掘り下げを行い、遺構・遺物が確認された。ここでは、遺構及び各遺物についてまとめたい。

遺　構

遺構は1トレンチで4基、5トレンチで2基のピットが検出された。いずれも調査地点の内陸側からの検出であった。当該部分は海側への傾斜が緩やかでありほぼ平坦面となっている。1トレンチでは、しまりのない暗褐色粘質土を埋土としており、新しい時期の掘り込みの可能性が考えられる。掘り下げを行った5トレンチにおいては埋土が直上の褐色粘質土に類似する。遺構は、内陸側の平坦面に広がる可能性がある。

土　器

Ⅰ類は室川下層式土器で、沖縄県沖縄市に所在する室川貝塚が標識遺跡である。今回の調査では小破片の土器が多く全形を覗うことはできなかったが、沖縄県の室川貝塚・伊礼原遺跡から出土している資料からみて、器形は尖底または丸底の深鉢形を呈するものと考えられる。本型式は、器面に施された文様で4つの分類を試みた。Ⅰa類としたものは、表面に沈線文を斜位または横位・縦位方向に施すものである。施文された文様は、単独あるいは組み合わせによって「ノ」字状や「ハ」字状を構成するもので、典型的なタイプとなるものが1トレンチから出土している第6図1・2・5である。Ⅰb類は、貝殻後背縁を使用して施された文様である。施文された文様は、雫状を呈して密に整列するもの（第12図84）、一定の間隔を空けたもの（第8図40）が認められる。しかし、第8図21のように雫状の文様を施すのではなく、二枚貝を上→下方向に押し当てながら引く文様が僅かだが出土している。施文は上→下方向に引いていることが肉眼観察で容易にわかるほどの痕跡を残している。この文様は、ある一定の幅を空けて施されたものと考えられるが、左下端部に残っている文様は幅が狭いことが確認できる。今後の資料増加で検証されることを期待したい。Ⅰc類としたものは、表面に丸状の刺突文が施されるものである。Ⅰa・b類よりも出土点数は極端に少ない。Ⅰd類については、条痕文または無文であるものを対象にした。無文土器は別型式の可能性も考えられたが、胎土および色調がⅠ類と類似することからここに含めた。Ⅰc類と同じく出土点数は少ない。Ⅱ類は型式が不明な土器群である。室川下層式土器と胎土・色調が同じであるが、いずれの文様分類に該当しないことから別型式の可能性が考えられる。特に、第6図8・第12図88は渡嘉敷島船越原遺跡出土の神野A式土器と文様構成が類似する。Ⅲ類は、面縄前庭式土器である。口縁部資料が少なく、胴部の細沈線の特徴から分類した。Ⅳ類は面縄東洞式土器に該当すると考えられる。平口縁のものが多く得られた。Ⅴ類は面縄東洞式土器に類似するが、弧状の施文具による刺突が若干の間隔をもって施されるものである。市来式土器の影響をうかがわせるものである。Ⅵ類は嘉徳Ⅰ式A土器、Ⅶ類は嘉徳Ⅱ式土器の特徴を有する。Ⅷ類は伊波式土器の範疇と考えられるもの

で、過去の調査や住吉貝塚・石原遺跡でも出土している。Ⅸ類は縄文時代の後期の無文土器である。第12図97は、胴部に向かい「ハ」の字状に開く器形であり、沖国大調査A・Bトレンチで数点の出土があり壺形土器として報告されている。胎土の様相や比較的薄手の土器である点などから、Ⅳ類からⅧ類に伴うと考えられる。Ⅹ類は、Ⅰ類からⅨ類に含まれないものを一括したもので、第9図59は突帯の貼付けなどが異なるものの、器形は沖国大調査Aトレンチ3区から出土した神野C式第1種Aに分類されるものに類似する。類例の増加を待ちたい。各類の層位的な出土傾向をみると1トレンチはⅦ層で混在する。2・4・5トレンチでは、各類混在する層を境にⅠ・Ⅱ類はより下層で、Ⅳ類からⅨ類はより上層での出土がみられ現在の編年の大枠と矛盾しない状況である。

石　器

石器では、石斧・敲石・石皿等が出土している。石斧として得られたのは2点で、第19図65は砂岩を素材としている。正面は敲打及び研磨により丁寧に整形され、刃部は僅かに刃先が残る程度となり大半は打欠により破損している。同図67は花崗岩の縁礫を素材とした敲石である。同図69は緑色片岩の円礫を素材とした敲石で、側面に敲打痕が認められる。16図116は表採資料だが、厚さ6cmほどの大型礫を素材とした石皿が得られている。第7図18は右縁辺を加工して鋭くしていることから、刃部として使用されたと考えられるためスクレイパーとして扱った。同図16は薄手のチャート剥片である。裏面に加工痕が認められないが、石器制作で生じた剥片と考えられる。その他、台石やチャート石核が出土しているが、用途については今後とも検討が必要である。また、チャートについては本島の他の遺跡でも出土が確認されているが、現在のところ島内に産地が確認されておらず、島外からの持ち込みを想定しておきたい。

貝・骨製品

貝・骨製品は、貝輪やサメ歯模造品などが出土している。第11図79は沖国大報告に類似品が1点みられる。未掲載遺物の中には加工状況は明確ではないが、4トレンチでオオベッコウガサの貝輪状の資料も1点出土した。これらは、奄美・沖縄諸島の同時期の特徴を示す遺物といえる。

自然遺物

脊椎動物骨遺体については、魚類ではハタ科・フエフキダイ科・ベラ科・ブダイ科など、爬虫類ではウミガメ、哺乳類ではリュウキュウイノシシなどが確認された。貝類は、海産腹足類26科195種、海産二枚貝類19科22種、陸産貝類2科3種が確認された。ただし、詳細な同定や食糧残滓と死貝との弁別については今後に課題を残す部分も多い。自然遺物の状況は概ね本島の当該時期の特徴と一致しているが、住吉貝塚で出土がほとんどみられないマガキガイが本遺跡では多く出土している点が注目される。

出土土器や過去の調査成果から判断すると、本遺跡の時期は縄文時代前期～後期に該当する。この時期は中浦洞穴・志喜屋武当遺跡・住吉貝塚・石原遺跡など沖永良部島でも多くの遺跡が形成されている。今後、周辺の遺跡との詳細な検討を行い当該期の様相をより明確にしていく必要がある。

〔参考文献〕(五十音順)

伊平屋村教育委員会　1981『久里原貝塚』伊平屋村文化財調査報告書　第1集　伊平屋村教育委員会

沖縄国際大学文学部考古学研究室　1989『沖国大考古　室川貝塚第2ー4次発掘調査概報』第4号　沖縄国際大学考古学研究室

沖縄国際大学文学部考古学研究室　1985『沖国大考古(その1)ーAトレンチーー』第7号　沖縄国際大学考古学研究室

沖縄国際大学文学部考古学研究室　1985『沖国大考古(その2)ートレンチーー』第8号　沖縄国際大学考古学研究室

沖縄国際大学文学部考古学研究室　1987『沖国大考古(その3)』第9号　沖縄国際大学考古学研究室

知名町教育委員会　1996『住吉貝塚』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(19)　知名町教育委員会

知名町教育委員会　1999『友留遺跡』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)　知名町教育委員会

北谷町教育委員会　2010『伊礼原E遺跡(第二分冊)』北谷町文化財調査報告書　第31集　北谷町教育委員会

西之表市教育委員会　1978『赤木遺跡・下剥峯遺跡・大四郎遺跡・内和遺跡』西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書1

横尾昌樹　1998「室川下層式土器の施文具についての一考察　-カワラガイを中心に-」『南島考古』№27　沖縄考古学会

図　　版

図版1

神野貝塚周辺空中写真(1)　国土画像情報(昭和52年撮影 国土交通省)

図版2

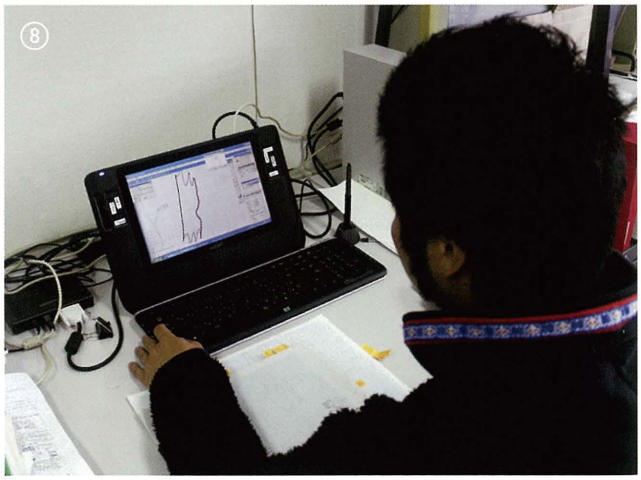
①神野貝塚周辺空中写真(2)　②大津勘のビーチロック

図版3

②

①1T～5T調査区近景　②6T～9T調査区近景

図版4

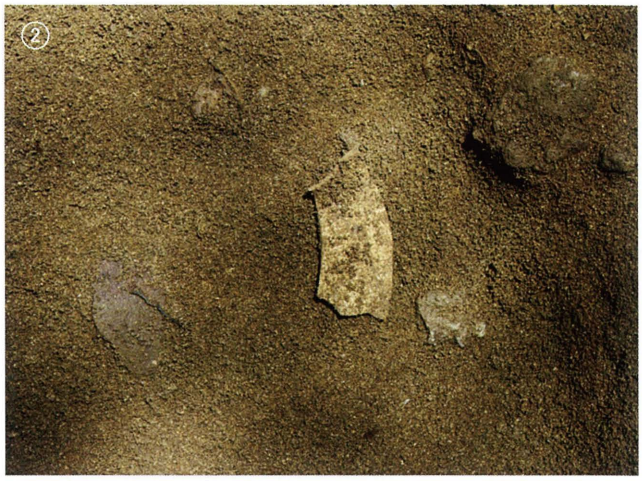


①表土剥ぎ状況　②埋戻し状況　③散水用水運搬状況　④発掘作業状況　⑤洗浄作業状況　⑥遺物乾燥状況　⑦実測作業　⑧トレース作業状況

図版5

①1T遺物出土状況　②1Tピット検出状況　③1T完掘状況　④1T南壁土層断面　⑤2TⅤ層　⑥2TⅤ層遺物検出状況

図版6

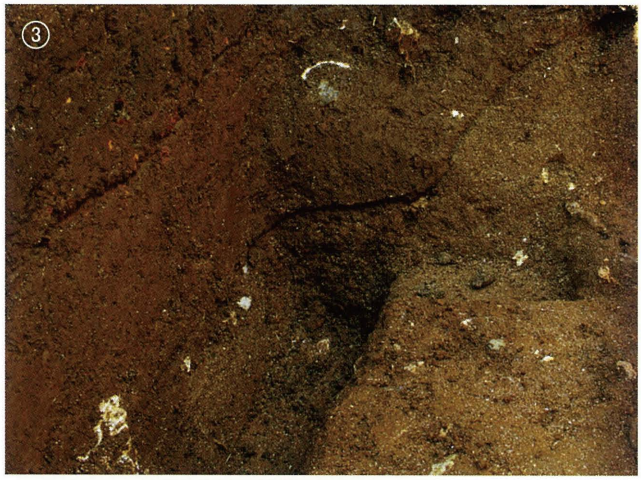


①〜④2T遺物出土状況　⑤2T北壁土層断面　⑥3T撹乱状況

図版7

①〜④4T遺物出土状況　⑤4T南壁土層断面

図版8



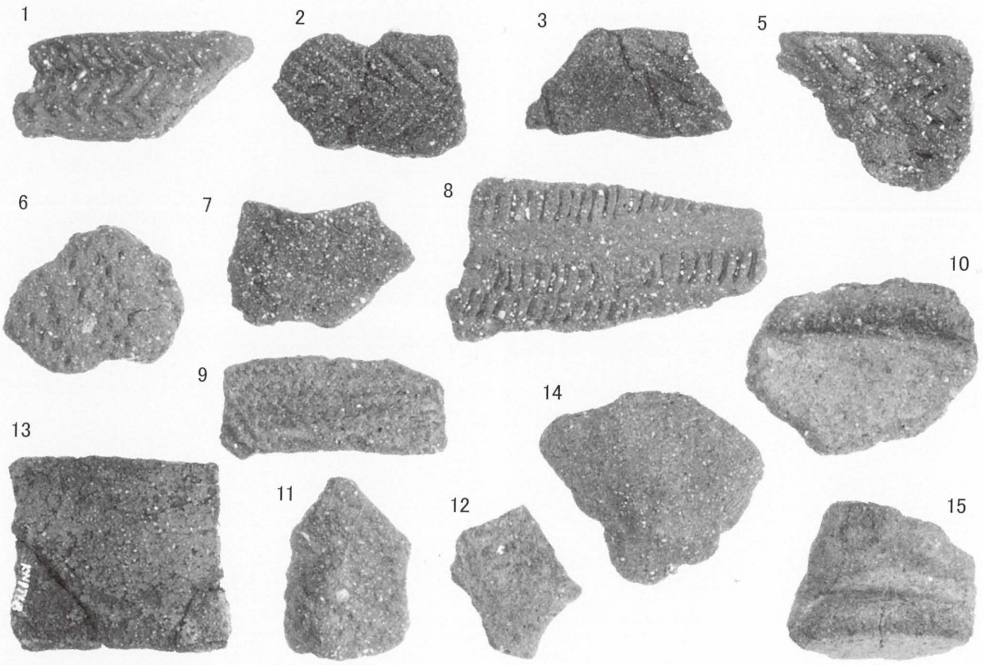
①5Tピット検出状況　②5T掘り下げ状況　③5T遺物包含状況　④5T南壁土層断面

図版9

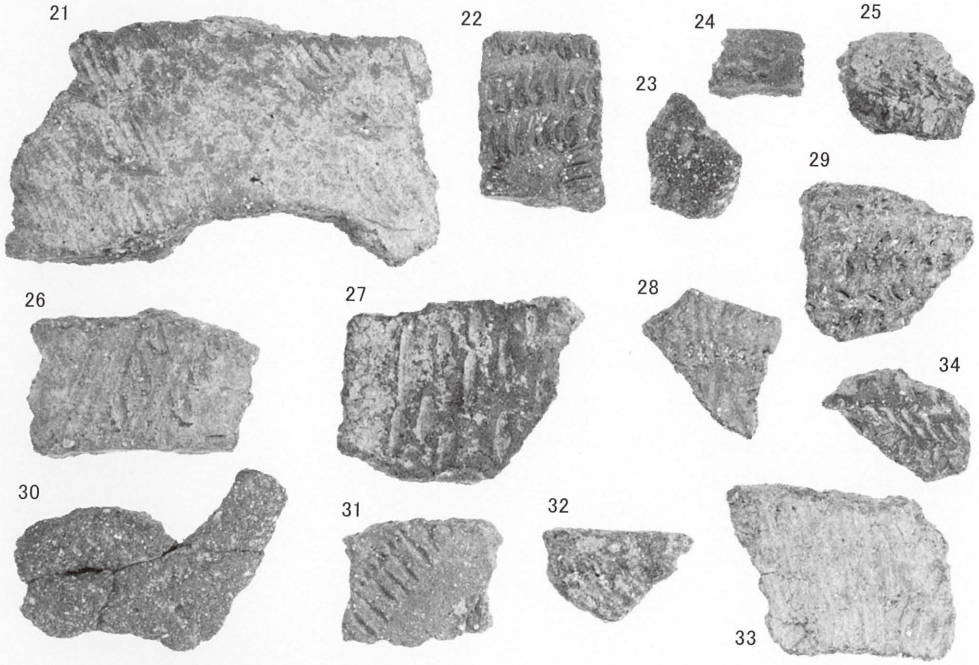
①6T試掘状況　②7T試掘状況　③8T試掘状況　④9T試掘状況　⑤⑥青少年リーダー体験学習　⑦考古学講座現地視察
⑧神野貝塚調査速報展・体験学習展示

図版10

1トレンチ出土土器

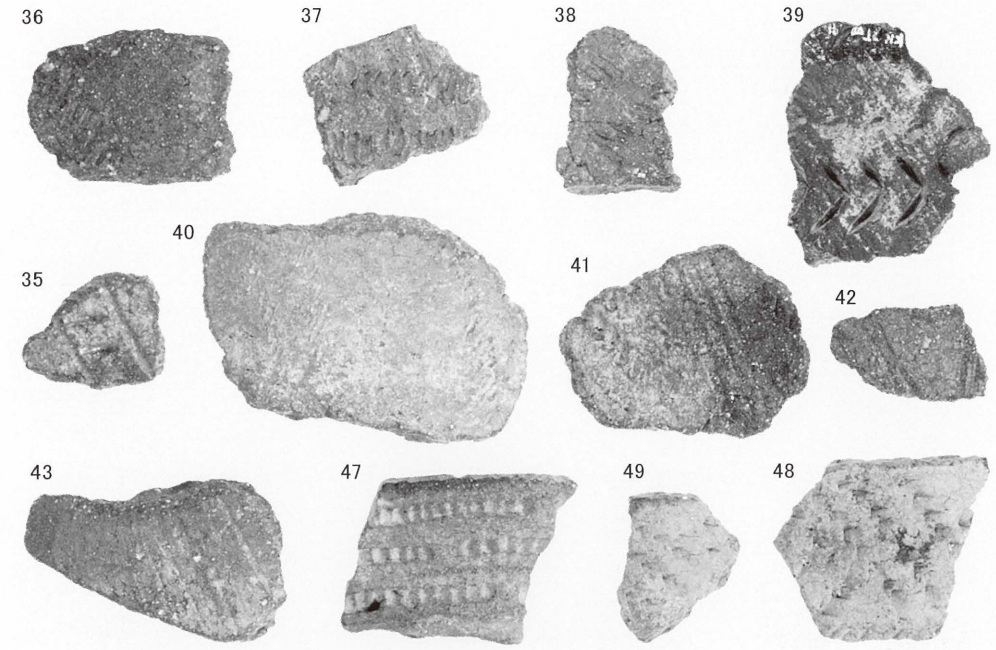


2トレンチ出土土器（1）

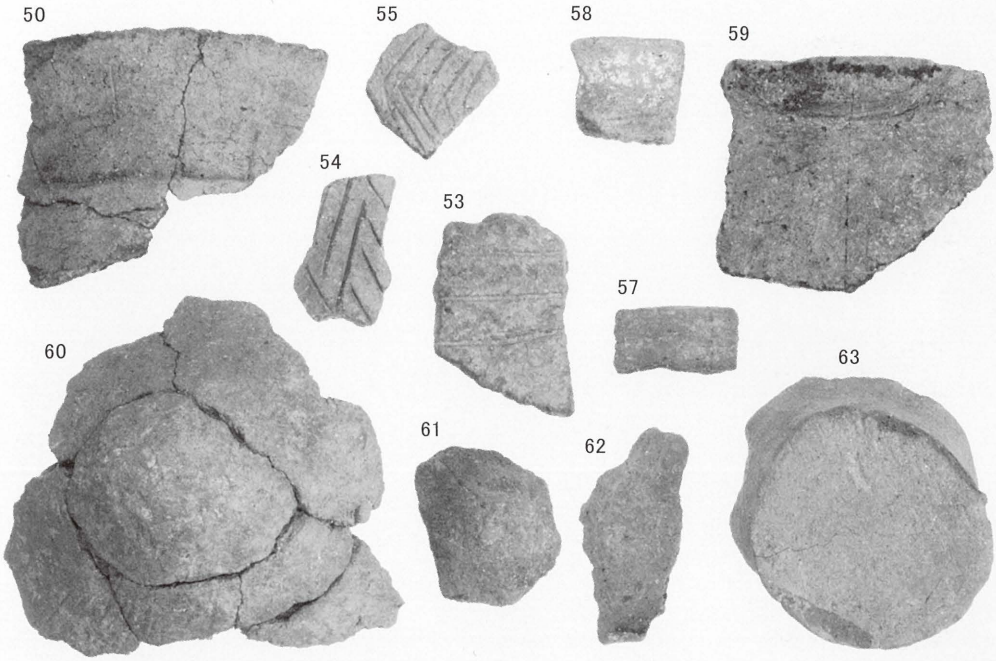


図版11

2トレンチ出土土器（2）

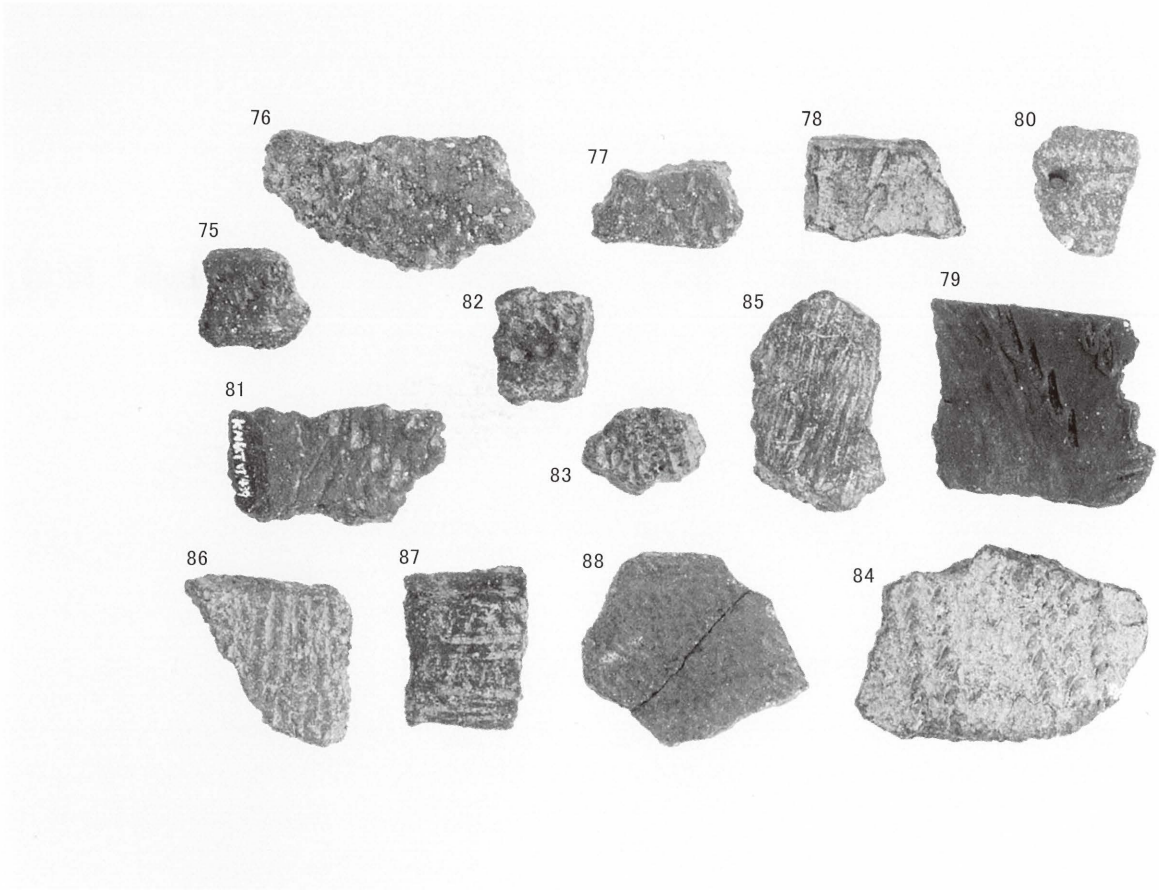


2トレンチ出土土器（3）

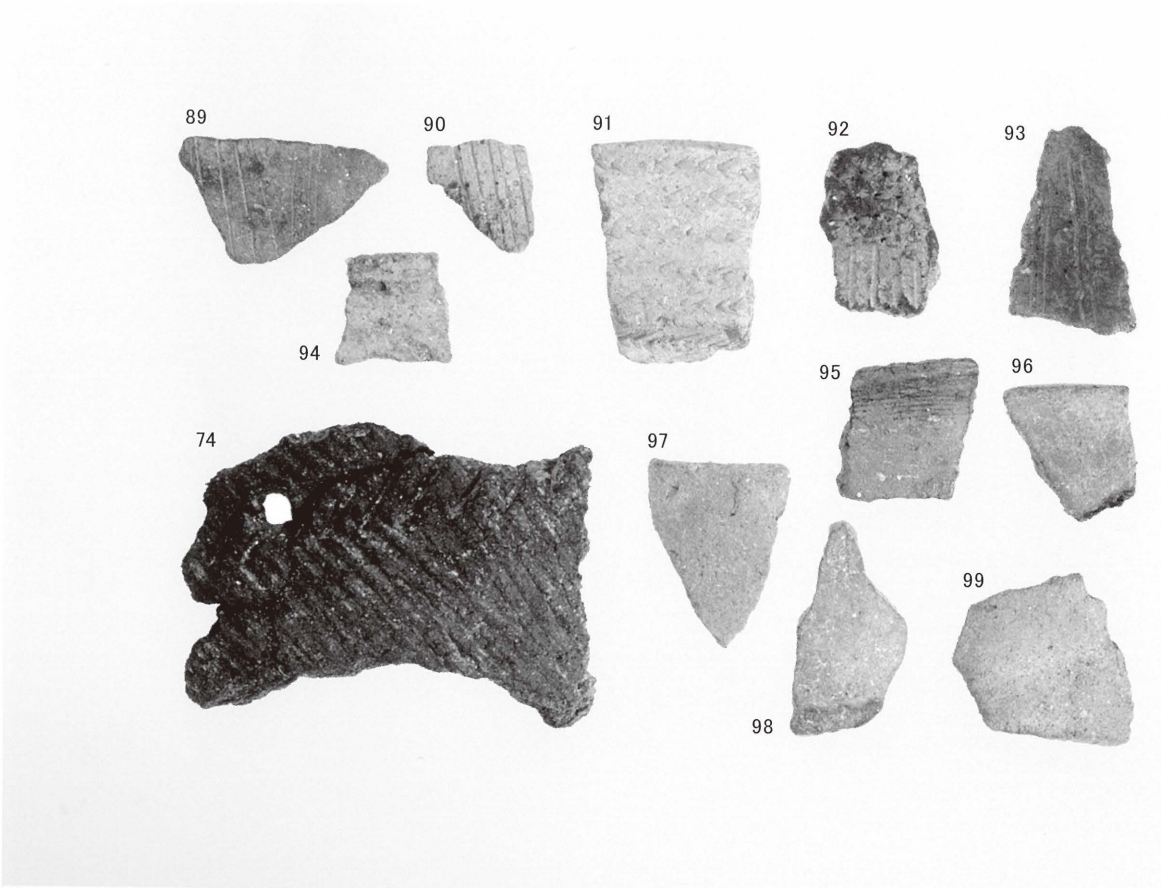


図版12

4トレンチ出土土器（1）

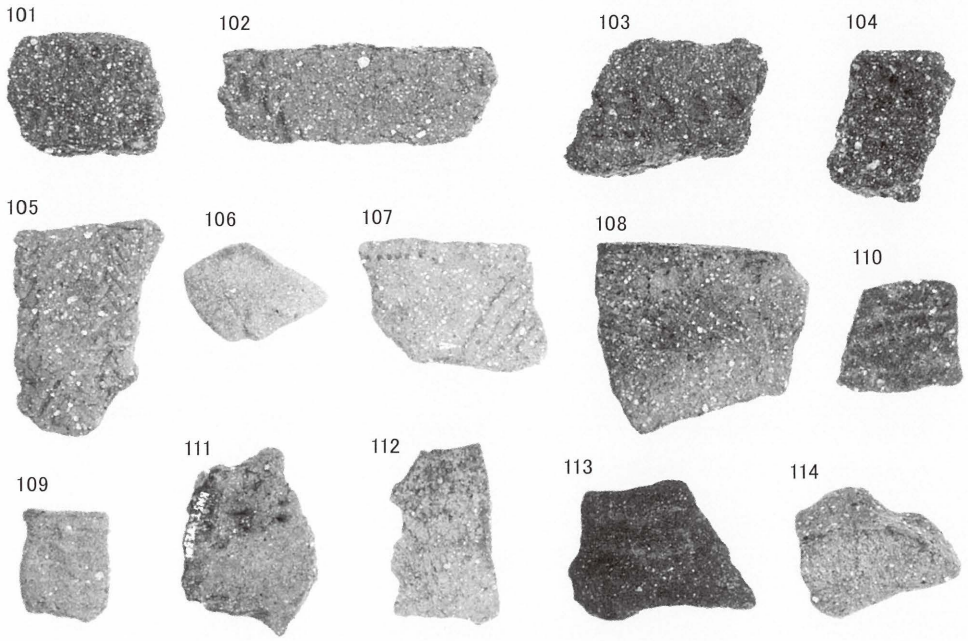


4トレンチ出土土器（2）

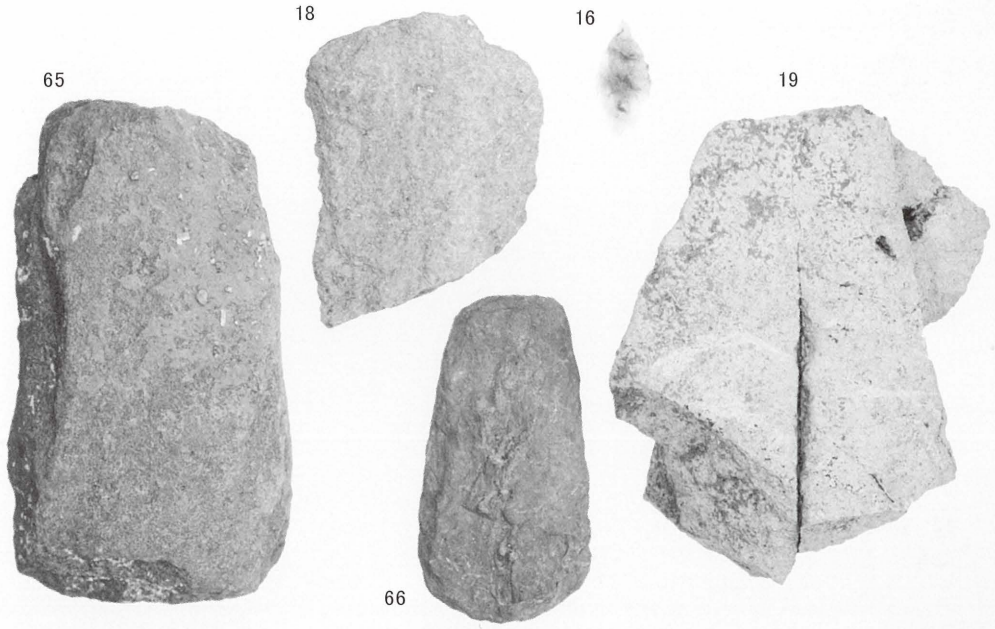


図版13

5トレンチ出土土器

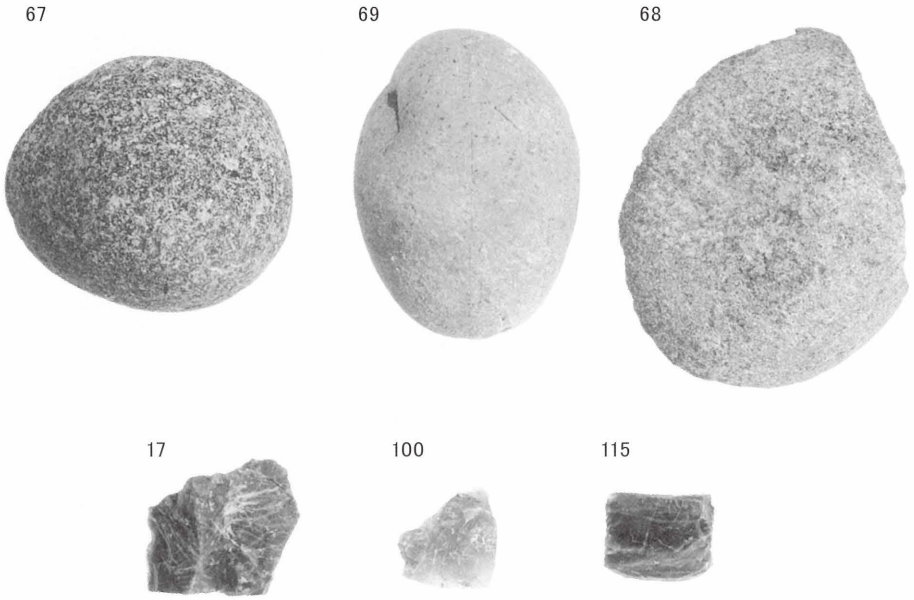


1・2トレンチ出土石器



図版14

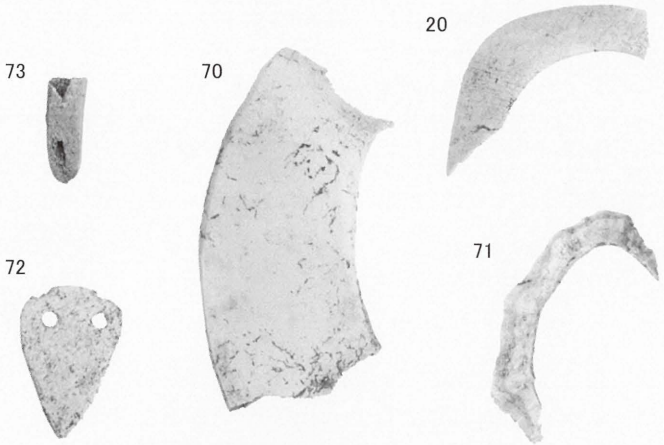
1〜5トレンチ出土石器



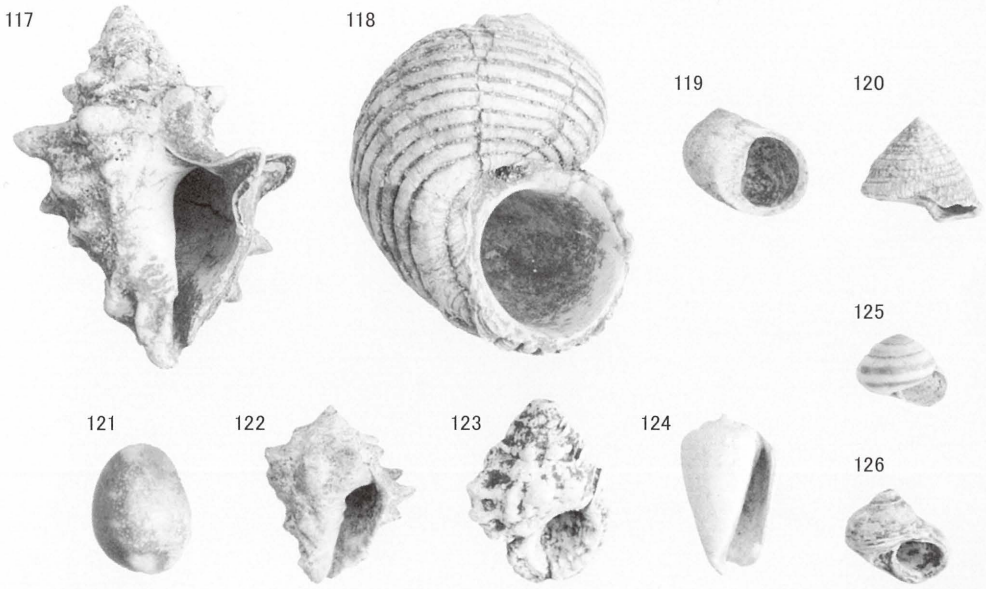
表採石器

図版15

貝・骨製品



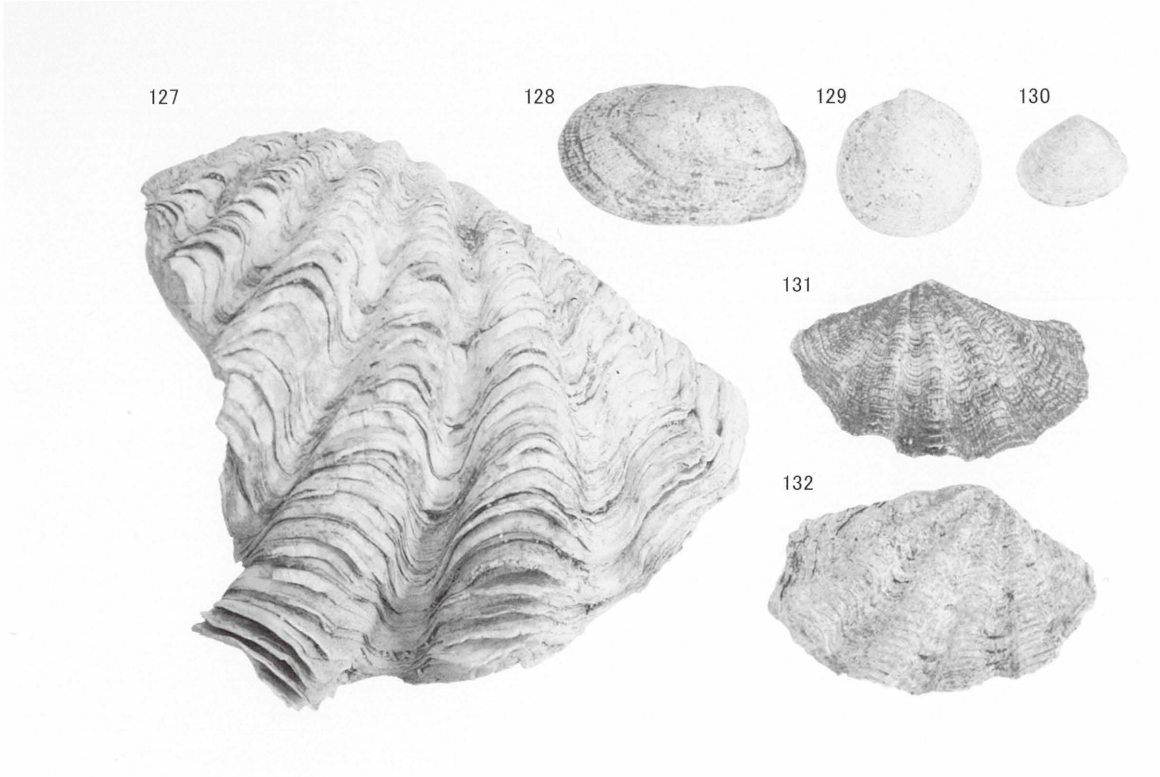
貝類遺体(1)



117. シラクモガイ　118. チョウセンサザエ　119. イシダタミアオマブネ　120. ニシキウズ　121. ハナマルユキ　122. コオニコブシ
123. オキニシ　124. マガキガイ　125. エラブマイマイ　126. タマキビ

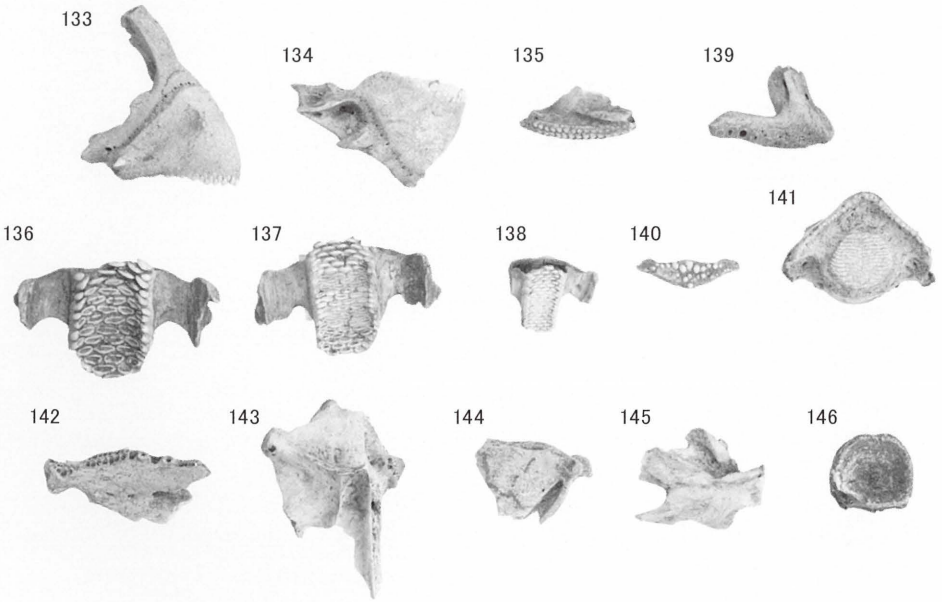
図版16

貝類遺体（2）



127. ヒレジャコ　128. エガイ　129. サメザラガイモドキ　130. イソハマグリ　131. シラナミガイ　132. ヒメジャコ

脊椎動物遺体（1）



133. ブダイ科 前上顎骨　134. ブダイ科 歯骨　135. イロブダイ 上咽頭骨　136. ナガブダイ 下咽頭骨
137. ナンヨウブダイ 下咽頭　138. アオブダイ 下咽頭骨　139. フエフキダイ科 前上顎骨　140 ベラ科 下咽頭骨
141. ハリセンボン 前上顎骨　142. ハタ科 歯骨　143. ハタ科 舌顎骨　144. ハタ科 方骨　145. ハタ科 角骨　146. サメ 第一椎骨

図版17

脊椎動物遺体(2)

147. イノシシ 上顎骨　148. イノシシ 下顎骨　149. イノシシ 頸椎　150. イノシシ 肋骨　151. イノシシ 肩甲骨　152. イノシシ 中足骨
153. イノシシ 基節骨　154. イノシシ 踵骨　155. イノシシ 距骨　156. イノシシ 上腕骨　157. イノシシ 尺骨　158. イノシシ 脛骨

脊椎動物遺体(3)

159. ウミガメ 大腿骨 160～161. ウミガメ 指骨　162～163. ウミガメ 肋骨板　164～167. 不明

報 告 書 抄 録

ふりがな	かみのかいづか
書名	神野貝塚
副書名	個人畑地改良に伴う埋蔵文化財試掘・確認調査報告書
巻次	
シリーズ名	知名町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	(13)
編著者名	森田太樹　宮城幸也
編集機関	知名町教育委員会
所在地	〒891-9295　鹿児島県大島郡知名町知名307番地　℡0997-93-3111
発行年月日	2014年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 ㎡	調査 原因
		市町村	遺跡番号	・’ ”	・’ ”			
神野貝塚	かごしまけん 鹿児島県 おおしまぐんちなちょう 大島郡知名町 おおつかんあざかんぬ 大津勘字神野	465348	42-3	27° 34′ 32″	128° 53′ 86″	2012. 7. 17 〜2012. 9. 27 2013. 3. 22 〜2013. 3. 25	96㎡	農業 関連

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神野貝塚	貝塚	縄文時代前期 〜 縄文時代後期	ピット６基	室川下層式土器 面縄前庭式土器 面縄東洞式土器 嘉徳Ⅰ式土器 嘉徳Ⅱ式土器 伊波式系土器 石斧・磨石・敲石 貝製装飾品 骨製品	

知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
個人畑地改良に伴う埋蔵文化財試掘・確認調査報告書

神 野 貝 塚

発　行　日　2014年3月31日

編集・発行　知名町教育委員会
〒891-9295 鹿児島県大島郡知名町知名307

印　　刷　有限会社 安田印刷
〒891-9213 鹿児島県大島郡知名町瀬利覚2117